

観光と交易の村における農耕と牧畜—ナムチェ村研究ノートから— 月原敏博（京都大学文学部）

これまで筆者は、ブータン、四川、ラサからツェタン、雲南、ネパールなどにおいて、チベット人ないしはチベット文化を持つチベット系住民に接する機会を得てきた。それらの経験で強く感じてきたことは、チベット世界はたいへん地域性に富むということであった。このことは、これまで一般に抱かれがちであった、多様性豊かとはいえないチベット世界像の見直しを強く迫るものである。この地域性の検討を押し進めることによって、従来幾人かの研究者が指摘してきたチベット世界の文化生態や社会構造、チベット地方史に関する見解にも、新たな視点を導入しうる、と思われる。しかしながら、各地域に関する知識が雑多に増え、細かな地域差には目を奪われがちでな一方、さきの印象を明確にしうる視点はいまだ未熟なまま定まっていない。本稿は、1989年夏の現地調査に始まったナムチェ村という一つの村のみの生業様式に関する研究ノートではあるが、このような事情にもよって、今後本格的に取り組もうとしているシェルパ研究とチベット世界研究の方向を探るための地理的な視点を提示することを企図している。

1. はじめに

クンプ地方の人と自然については、これまでよく知られてきている。人文・社会科学の分野でも、クンプ・シェルパ族はヒマラヤの高地民の代表例の一つとしてよく調査がなされており、数十年に及ぶ生活の変化を追った詳しい民族誌を記しているFurer-Haimendorfの研究をはじめとして、ヒマラヤ地域の中では、これまでに蓄積された研究量がもっとも多い民族の一つであるといっても良い。現地を訪れる前にわれわれが持っていた予備知識も、それらの研究に依存したものだった。調査村であるナムチェ村を最初にイメージするに際して大きな影響を受けたのは、次のような記述からであった。

Most of these villages lie in localities where there is sufficient level space for fairly extensive cultivation; the only exception is Namche Bazar, known in Sherpa as Nauje, which has so small a cultivated area that only a few of its 73 households can support themselves by the pursuit of agriculture. It is primarily a settlement of traders and, as such, the newest of the main

villages of Khumbu. (Furer-Haimendorf, 1964:5)

The share of trade in the Sherpa's income has always varied from village to village. Two thirds of the population of Namche Bazar which in 1957 numbered 296, then lived almost exclusively on the income from commerce.

(Furer-Haimendorf, 1964:15)

In Namche Bazar, on the other hand, a settlement founded by the grandfathers of the present generation, different conditions prevailed from the very beginning. For Khambas from Tibet were among the first men to build their houses on the new site, and Khambas have been prominent in the life of the village ever since. Being essentially a mercantile settlement, Namche does not require of its inhabitants

(Furer-Haimendorf, 1964:103)

「ナムチェはクンプの中でも、そのほとんどの世帯が、農業や牧畜よりも交易や出稼ぎに重点をおいてきた例外的な村であり、2～3の世帯を除け

ば、ナムチェ以外に家や畑を持っておらず、又、他の村のように一定の生活圏も形成されない。」

(鹿野 1978:87)

これらの記述によれば、「他の村々の生業が、伝統的な農牧生産中心であるのにひきかえ、ナムチェは例外的であり、多くは農牧生産には関わらず、交易に専門化した世帯が集まった村である」と理解し得る。われわれは、「チベット世界には珍しく、ほとんど商売人の世帯ばかりからなる村落」として、ナムチェをイメージしたのである。従来の研究は、クンプ・シェルバに伝統的な生業様式を、アルプスにあるようなトランス・ヒューマンス（高山地域特有の半農半牧生産様式であり、地理学で移牧と訳されるもの、この移牧は移動牧畜一般とは異なる）としてきた。これは、いろいろな標高に利用地を持ち、家畜を追う季節的なリズムに従って人が移住しつつ、農・牧生産双方を営む生産様式を指している。山岳地帯特有の地形条件を利用したところの、土地の垂直利用ともこれを表現できる。生産に利用する土地は垂直に展開しており、その上下に広がる利用空間の中に、労働力を適宜配置することによって有利な生産をもくろむものである。これまでの研究者は、このクンプ・シェルバの伝統的生業様式の典型例を、ナムチェ以外の、より古い村々に求めてきた。それらの村々では、住民の多くが農牧生産に従って頻繁に季節移住をしており、リスクの多い長距離交易などには一部の者をのぞいてさほど手を出さないとされるのである。このような、自給性・孤立性の高い、生産中心の村落に伝統的生業様式を求める見方からすれば、かつてから交易へはなはだ依存していたというナムチェは自給性・孤立性が低く、まったく対照的な村としてとらえられることになる。

しかし、実際にナムチェを訪れてみれば、「ナムチェは、農牧生産を放棄して、交易・観光業に専門化しているのではない」という現地での印象がつよく、最初のイメージを修正せざるを得なかった。また、文章の読みとりの厳密な意味では、上のような記述を浅く理解しすぎていたと反省せねばならなかった。従来の記述は、「ナムチェ村のほとんどの世帯は農牧生産には携わらない」と明記していたわけではなかったからである。

しかしこの過程を経たことによって、次のよう

な問題が生じた。それは二つに要約し得る。一つは、ナムチェの農牧と他の村のそれとは連続か非連続かという問題である。農牧を放棄しないことにおいては、ナムチェと他の村は共通・連続するように思える。しかし、この地方の伝統的な農牧生産をトランス・ヒューマンスとする従来の研究はナムチェを例外として扱ってきた。それならば、ナムチェの農牧はトランス・ヒューマンスではないのか？、いったいナムチェの農牧は、他の村といかなる違いを持っているのか？、という問題である。従来の研究は、これについては何も言及しておらず、交易以外のナムチェの生業にはさほど注意を払っていない。もう一つの問題は、ナムチェと他の村の農牧生産に明かな違いがあるのなら、その違いはなぜ、そしていかに形成されてきたのか？、ということである。ここにおいても従来の研究は、交易を中心にナムチェの歴史を見てきたのである。

本稿の文脈は、以上のような問題意識に促された考察であって、おもに、次のような二つの試みからなる。

第一の試みでは、従来、観光と交易の村として知られ、その農牧生産については注目されることの少なかったナムチェにおいても、トランス・ヒューマンスの名残と表現可能な土地保有と農・牧生産が、多くの世帯において保持され続けていることを確認する。これにはおもに、1989年夏の現地調査で得られた世帯ごとのデータ、特に土地・家畜所有と構成員の就業分野に関するデータを用いる。

第二の試みでは、従来この地域のチベット高地住民にとって、交易をも含めた生業戦略総体の性格を反映するものとして家畜種の選択があることを示し、また、選択された家畜種は、翻ってその住民の生業様式総体の性格判定基準にもなり得ることを提起する。また、ヒマラヤ南面高地のより典型的なトランス・ヒューマンスはヤク群の移牧を生業の中心におくものに求められ、ヤク飼養からゾウ飼養への移行は、牧畜に重きをおいた伝統的なトランス・ヒューマンスから、農耕・交易へと生業の重点が移行することに対応しており、その生業の変質は、近現代のナムチェ以外のクンプ諸村でも進んできたことを確認する。

本稿の考察によって、さきにあげた問題を解明してみたいと考えるが、考察の過程では、従来の

研究成果も利用しながら、特に農耕・牧畜の存立基盤である自然条件、各生業部門へむける労働分業、家畜種の選択、また、これらの歴史的変化と地域間の人口移動に注目したい。村や地方を越えた、より広い空間であるチベット世界のなかで、ナムチェ村やクンプ地方の位置づけを意識するならば、特定の生業部門にのみ着目してナムチェ村を例外化するのではなく、さまざまな空間的スケールにおいて、各地域間にみられる連続・不連続を確認してゆかねばならない。そしてそこでは、個々の地域の生業様式は、交易をも含めた総体として評価される必要があるのである。

2. ナムチェ村の景観

(1) クンプ地方とナムチェの位置、自然景観

図1、2にみるように、東部ネパールの北部国境に接するクンプ地方は、二つの大きな谷からなる。一つは北東方向へ延び、世界最高峰に達しているドード・コシ水系である。もう一つのポーテ・コシ水系は、ヒマラヤ越えの交易ルートであるナンバ・ラ(約5800メートル)へと西北方向へ延びている。この二大水系は標高2650メートル付近で合流する。調査村であるナムチェ・バザールは、その合流点の上、標高約3400メートルのごく小さな支谷のつくる、南に開いたテラスに位置している。この支谷は、集落から下方では滝をまじえた急流となってポーテ・コシに落ちているが、集落から上方では扇形に広がる凹状斜面となっており、水流は消えている。植生は、集落の上方は草地となっているのに引き替え、下方は針葉樹林となっている。集落をかたちづくる家屋と耕地の集塊は、この扇形の中央にある平坦地を望むがごとく、なかば同心円状に、また階段状に広がっている(図3参照)。

Joshiのまとめに従えば、ナムチェの気候は次のように要約できる。月平均気温は、最寒月(1月)が-0.4度、最暖月(7月)が12度、1月の平均最低気温は-7.9度であり、年平均降水量は1048ミリ、年間降水日数は平均127日である。降水の大部分は夏季のモンスーンによってもたらされ、年間降水量の78パーセントが6から9月、89パーセントが5から10月に集中している。しかし、降水量の年ごとの変動は大きく、多い年は1710ミリ(1953年)、少ない年は708ミリ(1969年)といった例がある。日本でもそうであるように、夏の降雨の集中する時

期や地域にはかなりの片寄りがあるのである。また、平年値から算出する限りでは年間を通して乾燥月はなく、変動を示す各年の実例を勘案しても、乾燥月数4以下である年が90パーセント以上を占める湿潤気候に属する(Jhosi, 1982)。

この気候のもとに広がっていた自然林は、数百年間のシェルバ族の歴史の中で大きく変えられている。集落の近くに広がる森林(S:ナティン)は、モミ(S:ターシン)、マツ(S:メタン)を主とする針葉樹林であり、建築用材や燃料に使われる。このほかに、シャクナゲ(S:カルマ)、カンバの木(S:タクバ)などがある。これらの木々の葉は採草地の施肥にも使われている。このほか生活の中で利用されるものとして、タケノコ(S:シャモ)や、毎朝の祈りの時に焚かれ、香りの良い煙(S:サ)を出す葉として知られるヒノキの類、ビャクシン(S:シュクバ)などもある。

(2) 村の人文景観と立地条件

従来の研究でも記されているように、クンプ・シェルバは村以外の土地にも家屋や石囲いのテント場、干し草を貯蔵する倉庫などを私有していることが多い。そのうち、一時的居住のかなう家屋を以下では副住居と呼び、世帯の生活の中心となる主住居と区別したい。主住居には、世帯の家財道具のほとんどが収納されている。恒常的居住にかなう生活用具がどのくらい揃っているかについては、個々の副住居によってかなりの違いがあるが、副住居の設備は主住居に比べ、はるかに劣っているのがふつうである。

各世帯は、主住居がある村付近には耕地も持っており、クンプ地方の村は、耕地と主住居が集合し、ほとんど途切れることなく連続しているところと言い換えることができる。ナムチェもこのような村の一例である。図3は、調査中に世帯と家屋を対応させるために作成した地図であるが、今後耕地や家屋の持つ属性を含め、改訂を試みたい。図3にある範囲が村人の認識に従った狭い意味でのナムチェ村である。これの周りは、村の入り口のしるしである門(S:カニ)、多くのマニ石(S:ドマニ)やチョルテン、上方にいくつかある火葬場(S:トゥルサ)などに囲まれている。この内側には、耕地と主住居が扇状に連続する。主住居である家屋は一般に二階建てで、一階は家畜、燃料などを収容する空間になっている。人がすむのは

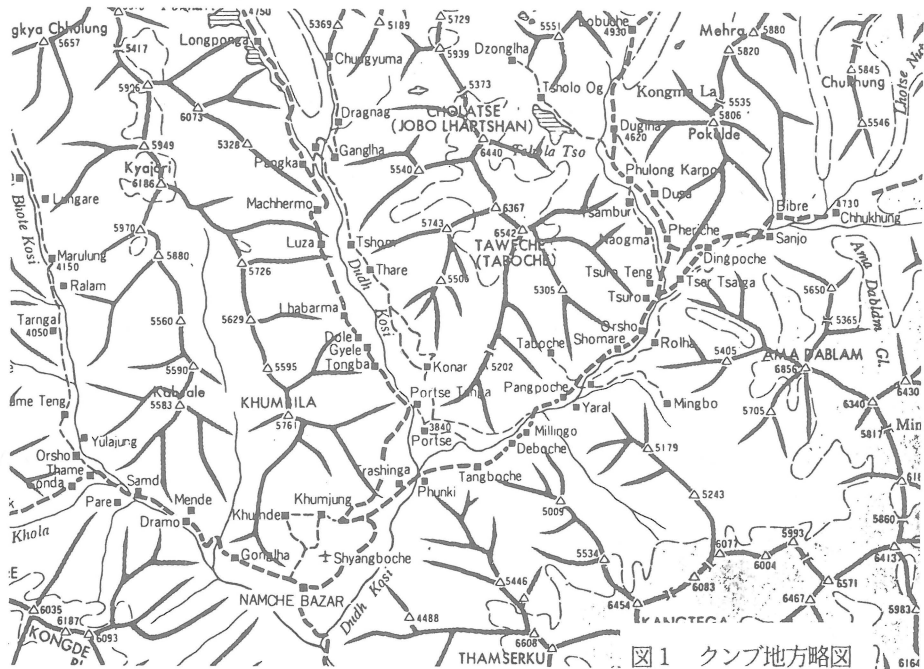


図1 クンブ地方略図

図2 ナムチェ村の位置

- 点線は村の行政区界を示す。
- 原図はNepal-Kartenwerk der Arbeitsgemeinschaft Nr.2 Khumbu Himal 1:50,000, 1988 Edition.

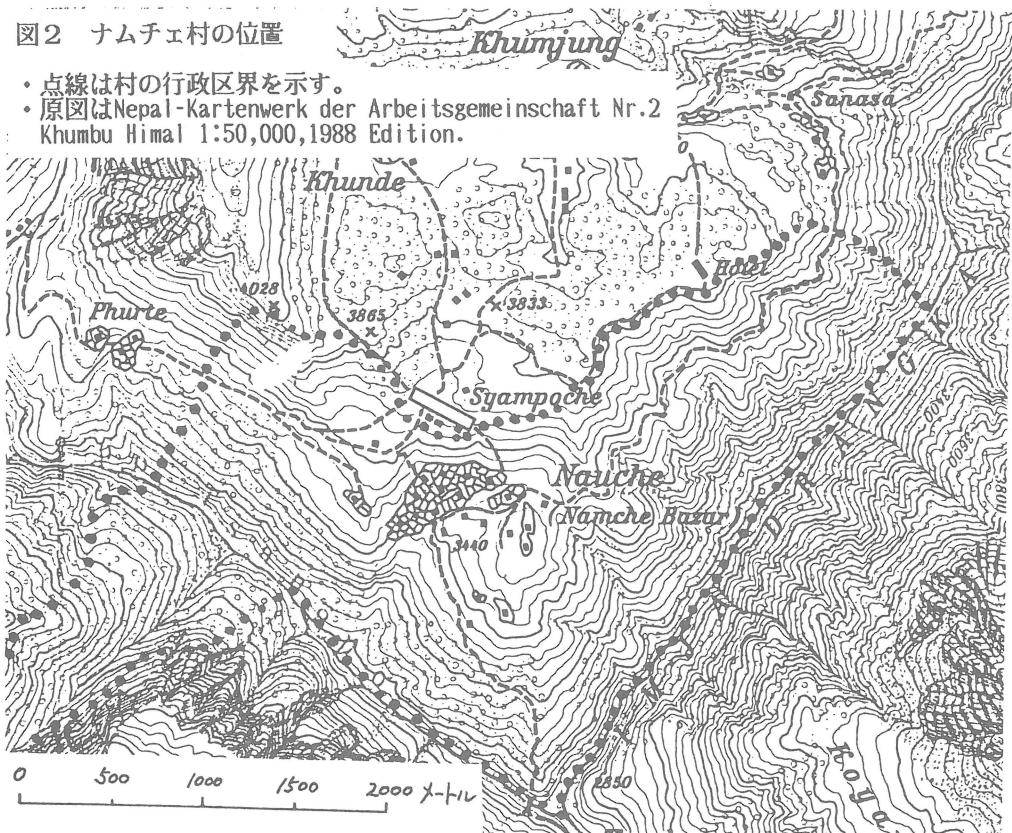


図3 ナムチェ村の家屋配置図

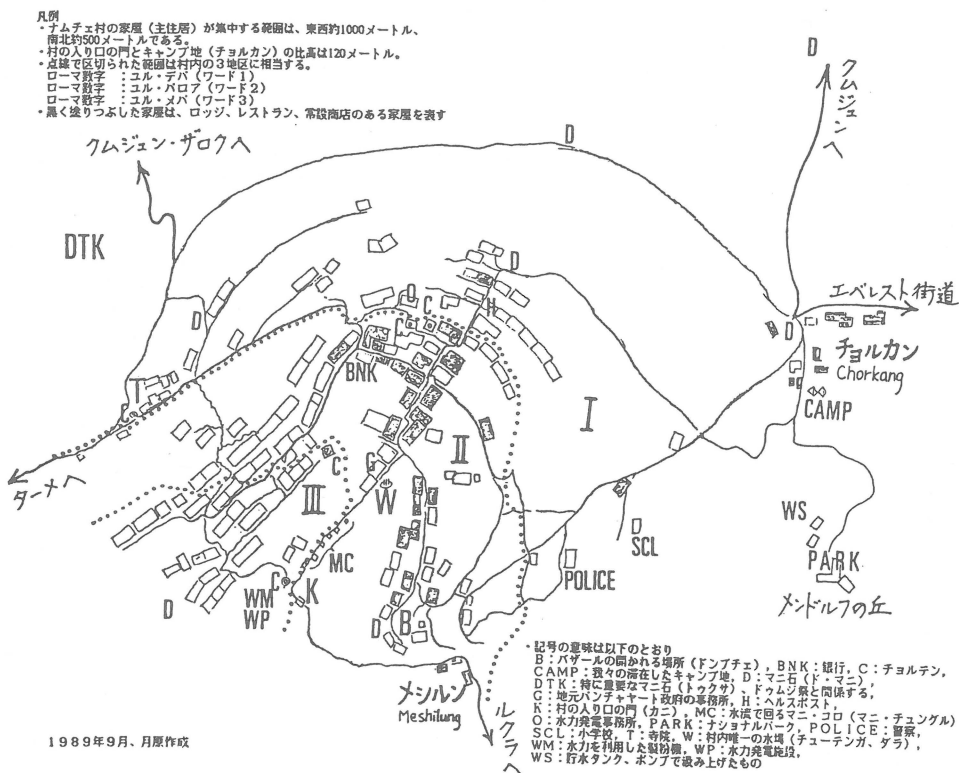
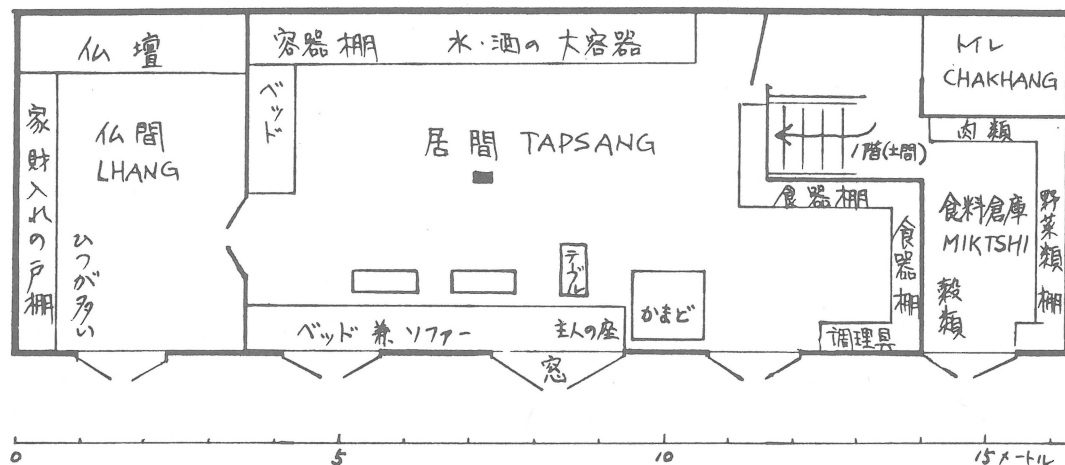


図4 ある世帯の二階平面図



二階で、居間、倉庫、仏間、トイレなどがある。図4はある家の2階の間取りを示したもので、一般的なものである。ここの天井は竹を編んだマットであった。屋根は傾斜のある板葺きである。しかし、最近ではトタン葺きの屋根に改装した例も多くなっている。屋根の上にはラマ教信者であることを示す旗（タル、ルンタル）が立っている。まだ色あせてない鮮やかな旗も見られるが、村人によれば、上から順に青、白、赤、緑、黄とならび、それぞれ空、雲、村の神、水、大地を表すという。

ナムチェの外縁から隣村との行政区界へ至るまでの土地のほとんどは、森林や共有放牧地となっている。しかしその間には、塊状に集まった耕地（S: シン）や採草地（S: チサ）が、ときには家屋（副住居や収納庫）を付随して現われる。これらはふつう私有のものである。ただし、これらの私有地・付随家屋は、隣村の人の持ちものであることもある。また、行政区界付近の森林は、隣村の人も利用している例がある。このように、主住居の集合する村より外側の土地は、村の枠を越えた、地域住民の共有地（N: サザ、S: ピーマ）としての性格をも持ちうる場所と考えられる。

ナムチェ村の行政区域は、図2に点線で示したとおりである。ナムチェ村の上方、クムジュン、クンデとの境界は、シャンボチェ空港からホテル・エベレスト・ビューをつなぐ線の少し下にある。東の境界はホテル・エベレスト・ビューのあたりからドード・コシへと下る尾根（Dambakok付近）であり、西の境界はボルテという小集落の手前辺りからボーテ・コシへ落ちるルンゼ（Darzam）となっている。下方はボーテ・コシ、ドード・コシの川岸までであるが、ドード・コシ流域では、対岸の急傾斜の森林の一部もナムチェに属している。この村の行政区は決して広くはない。険しい地形のために、標高でいえば2850メートルから3800メートルに至るまでの高度差をもってはいるが、村から村境までは、歩いて30から90分程度の距離しかない。

立地条件についてみると、ナムチェ村は、自然条件の良い場所にあるとは決して言えない。平坦地は狭く、耕地と家屋のほとんどは傾斜地かそれを開いたテラスに位置している。水を得る便も悪く、集落の一番下の部分に湧水場（チューテンガ、ドラ）があるのみである。生活用の水のほとんど

はここから運ばれている。近年、メンドルフの丘に建てられたナショナルパークの施設への給水設備として、湧水場からポンプで汲み上げた水を貯水タンクに溜める設備も一つだけある。近くのチョルカン地区の家々もこれを利用しているが、冬には凍結して使えないという。自然条件の上では、比較的古いクムジュンなどの村と比べると、ナムチェはかなりの劣地にある。人口（1989年現在で700人程度）に比べれば耕地は狭く、放牧地もさほど大きなものがなく、特に高山の放牧地は全く無いことから、この村の行政区域に限っていえば、農牧生産にとっては制約的条件ばかりである、といえる。しかし他の村と比較しても大きいほどの世帯数を抱え、また、定期市、政府関係施設、銀行、旅行関係の建物といったものが立地している背景には、他の条件を考慮する必要がある。交通の上では、ナムチェはクンプ地方の中心であると同時に南へ開いた玄関である。つまり上方の二つの谷と下流側という3方向からの交通路のジャンクションとなっている。この、自然条件の上で劣っていること、交通上の結節点であることの2点において、ナムチェ村はクンプの他の村とは際だった条件を備えているといえよう。

3. 農耕と牧畜の概観

（1）村を構成する民族集団

今回の調査では、河合、古川両氏と共同して、ナムチェ内の各世帯に関するデータを収集した。そのデータは河合の本誌別稿の基礎データ表1・2にあるとおりである。世帯ごとに調べられた項目は、構成員、各構成員の仕事内容、世帯の所有する土地面積と家屋数、それらの位置などである。中央から派遣されている役人や軍人の世帯は、一時的な外来者の世帯であるから調査対象から除外している。なおこれらの世帯は、新しく政府関係施設が建てられつつあるナショナルパークなどのある村の東部に多く住んでいる。

調査結果からすると、村に生活する世帯は次の4カテゴリーに分類しうる。1: シェルバ（約80世帯）、2: シェルバ・チベタン（約20世帯）、3: チベット難民（約12世帯）、4: ネパーリー（約19世帯）である。この識別は住民自身のそれに従ったものである。一般にシェルバ族として自他ともに認める人々は、1と2である。3や4にあたる世帯はほとんど私有耕地や持ち家をもって

いない。ただし、調査結果によれば、基礎データ表1にあるように、古くから村に住み着いているカミ(Kami)と呼ばれる鍛冶屋カーストのネパリーのみは例外である。1と2の違いは、最大の祭、ドゥムジの持ち回りの運営員であるラワに加わっているか否かである。また、2、3、4に属する住民でも、通婚するなどして幾世代かを経て1に属し得ることが知られている。シェルバ社会にはチベット人やネパール系の住民が参入し続けてきたといわれており、厳密に言えば2にはシェルバ・ネパリーと呼ぶべき世帯も含まれている。本稿では、1と2の、いわゆるシェルバ族の人々の生業を取り扱う。平均的なシェルバ族の世帯は、家族が4~5人、それから使用人が1人程度といった構成である(世帯平均の値は家族4.94人、使用人0.6人であった)。

(2) 農耕

ナムチェは3400メートルという標高によってもたらされる寒冷のために、夏季のみ耕作可能な一毛作地帯に属する。この夏作は、モンスーンのもたらす降雨によったものである。作物は、ジャガイモ(N:アル、S:リキ)を主とし、マメ類(トゥリ、フェルマなど)、ネギ(ゴバ、ゴクバ)、カブ(N:ムラ、S:ラウ)、ニンニク(S:タブゴ)、キャベツ(コビー)などの野菜類がある。ごく一部にはソバ(N:パーパル、S:トウ)がある。

ヒマラヤ地方にジャガイモが導入されたのは、1774年、ブータンからチベットを訪れたイギリスの使節Bogleが持ち込んだのが最初である(Markham, 1876:19)。クンプ地方へ入ったのがいつかは正確には知られていないが、Furer-Haimendorfが記録している伝承からすると、19世紀の中ごろのことである。それ以後、ここ150年くらいの間に、ジャガイモはクンプの農作物の筆頭の位置を占めるに至った。それまでの主作物であったソバや大麦にとって代わり、主食ともなったのである。また、このジャガイモの導入によって、土地あたりの人口扶養力が増し、クンプ地方の人口は倍増したといわれている(Furer-Haimendorf, 1964:8-10; 鹿野 1972)。

ジャガイモやソバには灌漑は必要でなく、一般に犁耕も不可欠ではない。ナムチェの農耕は、夏作のジャガイモを中心とした、手鋤(トゥクジ)で耕される天水に依存した畑作である、といえる。

耕地景観の特徴の一つは、畑(S:シン)や採草地(S:チサ)はすべて石を積んだ塀(S:ドガル)によって囲まれていることである。これは家畜の侵入を防ぐためである。農地を石などで囲むことは、ヒマラヤ高地を問わず農地の近くで家畜放牧を行う地域に共通した景観である。

農業労働の主役は女性であり、それも多くが使用人である。われわれの滞在した8月末から9月初めは、ちょうどジャガイモの収穫が盛んで、3人から10人くらいの女性達の集団が楽しく作業している様子がよくみられた。基礎データ表1にみるように、シェルバ族の世帯は1人から3人ほどの使用人を雇って家に住まわせていることが多い。使用人たちは、タマン族、グルン族、シェルバ族といった、南方の低地(ソル地方など)からきた諸部族が主であるが、まれに付近の村のシェルバ族であることもある。女の使用人の主な仕事は農作業である一方、男の使用人の仕事は、薪運び、草刈、旅行関係の雑用などとなっている。男が農耕に携わるのは、力仕事や女の人手が足りない場合に限られると考えて良い。

(3) 牧畜

クンプのシェルバ族の経済の中で牧畜が果たす役割は農業と並んで小さくない。伝統的な食生活においても、牧畜は日々の重要な食物を提供してきた(柳本, 1970:1971)。ナムチェ村の場合でも、飼養頭数は多くなくとも、世帯で何頭かの家畜を飼養しない例はまれである。このことは基礎データ表2でも確認される。家畜種についてみると、羊、馬、騾馬がたいへん少なく、ほとんどが、ゾウ、ウシといった牛類家畜である。平均すると、これら大家畜の頭数は、一人当たり1頭より少し下回る程度であろう(34世帯についての平均値は、1世帯あたり4.3頭)。また、ヤクを所有している世帯は限られている。

牛類家畜全てにおいて、牝は乳用、牡は荷役用である。ヤクはチベット高原とその周辺域に見られる長い毛を持った牛類家畜で、野生種も、それ以外の地域にはいない。またこれまで、チベットの生活文化との深い関わりあい指摘されてきた家畜である。ゾウはヤクとウシの雑種で、おもにその一代雑種が利用される。牡(S:ゾプキョ)の場合は牡ヤクより扱いやすく、力が強く、低地に強いという利点がある。牝(S:ゾム)の場合は牝

ヤク (S: ナク) などより乳の量が多い (約2倍)。ナムチェの家畜の中で最も多いのがこのゾウである。クンプ地方のゾウは一般に牝ウシ (S, T: ラン) と牝ヤクを交配させたものである (小林 1984)。

チベット世界でみられるヤクやゾウの牧畜においては、夏季の野外放牧は、牝の場合は乳生産、牝の場合はよく太らせるために重要であるが、ナムチェ村の領域内には高山の放牧地 (N: プラキャナダップ、S: レサ、イェルサ) はない。夏の前半の共同放牧地 (4000-4500メートル) は、ブルテ上方のギャジョの谷にあり、隣村の行政区に属している。われわれが村にいた頃には、ナクを除く家畜はほとんどすでに山から降りてきており、牝はトレッキングや登山隊のための荷運び、牝は村落近くで日帰り放牧されていた。ちょうど冬の飼料を準備する頃で、集めた草を竹籠 (チェウ) に満載して担いで村に運んだり、庭や屋根うえでそれを広げて乾かしているのがよく見られた。草をとる場所は、村から遠くて家畜が余り行かない森の中の急傾斜地や、石垣に囲まれた採草地 (S: チサ) である。

チサは、村の上方の丘や、耕作には適しないと思われる場所でよくみられる。例えばザロク (Zarok) というところは、巨大な大石がなだれ落ちて堆積した場所で、通過するだけでも困難なところであるが、巨石の間の狭い地面の多くが採草地になっている。チサでは春5月にウシの糞に木の葉を混ぜた肥料 (S: チャ) を播き、夏9月頃に生えた草を刈る。草を刈るのは年にこの一回のみで、刈った後は、2、3日乾かしたのち村に持ち帰り、家屋の一階 (S: ウォン) に収容するという。チサに付随したツァガンと呼ばれる小屋に貯蔵されることもある。また、チサの近くに、屋根のない石囲い (S: テワ) を見ることがあるが、これは一時的に家畜をつれて滞在するとき、屋根がわりにテントを張って泊まる場所である。

村人は草の種類とその効用についてよく知っており、多くの草の種類を識別している。その例をあげれば、村周辺の高地にある細くて柔らかい草で、干し草にも好まれるツァケやフラウチェ・メンド、細くて堅いが家畜を強くさせるバンザブロー、森の中や急傾斜地にある茎の長い草であるリザヤクティンバなどがある。

冬季は、家畜は屋間にはナムチェより下方の林間放牧地に放し、ふつう夜は家の一階 (ウォン)

に収容する。降雪があって全面的に飼料に頼らなければならない期間は一冬に長くて2、3週間のみであるが、そうでない期間もあわせ、冬の2、3カ月の間は、飼料をかなり食べさせるようである。飼料には、採草地や急傾斜地で集めた干し草のほか、ジャガイモ、カブラ、グヌル (一種の飼料作物) などの、収穫後乾燥させて飼料としたもの、またバンザと総称される残り物 (残飯、地酒であるチャンのしぼり糟など) を加えるので、干し草の量は、1頭1日あたり1キロあれば足りるという。約50ドンパの広さのチサがあれば、約400キロの干し草がとれるため、4、5頭の家畜の冬の飼料はまかなえるという。

4. 生業に関わるナムチェ村の歴史

さて本題である農牧についての具体的データの検討にはいる前に、村の発生に始まるナムチェ村の生業に関わる歴史の概要をおさえておきたい。従来の研究が指摘しているように、ナムチェは村の発生以来、他の村とは異なった事情をもってきた。そのため、ナムチェの現状の農牧を検討する際には、その歴史と生業の変遷の概要をクンプ以外の地域との関係にも注意しながら検討しておく。

(1) シェルバ族のクンプ移入から村の発生

シェルバ族自身はナムチェのことを「ナウジェ」と呼ぶが、これが「深い森」を意味しているように、ナムチェ村付近はかつて森林であった。しかし現在では集落の上方には木が全然ない。近年は、これが原因となって泥流による災害が夏季に発生したこともある。クンプ地方全体においてこのような「Deforestation」が問題にされ始め、その原因について研究されてきている。Byersによれば、クンプ地方の植生破壊はシェルバ族の環境利用の産物であり、特に数百年間の経済の基軸であった牧畜の影響がもっとも大きいという (Byers, 1987)。

Oppitzによる史料の解読によれば、最初のシェルバ族のクンプ進入は、16世紀に起こった。シェルバはもともと東チベット (カム地方) のSalmo Gangにいた。北方の遊牧民ホル族におされ、いったん中央チベットのTinkyeへ移動していたが、1533年頃ネパールのソル地方へ入った。この第一波は4つのクランからなり、それぞれ数家族程度の規模でしかなかった。南のルートからクンプに入植がなされたのである。次に、18世紀の中ごろ、

ナンパ・ラ（峠）を越えて、チベットのティンリ一地方から第二波の移入があった。この第二波はクンプ地方にのみ及んだ。最後に第3波として徐々に移入し続けたのはいわゆる「カムバ」と呼ばれるチベット人たちである。カムバという呼称は、本来東チベット（カム地方）に住むチベット人をさすが、シェルバ族が用いる呼称にはこうした意味はなく、4世代以内にチベットからクンプに移入したものは皆こう呼ばれる。彼らは季節労働者としてやってきて住み着いた。また、シェルバ族と違ってクラン名を持っていないともいわれ、出身村の名がそれに近い意味を持たされて使われる程度である。Oppitzによると、シェルバ族のクランははっきりした外婚集団であるから、この点では出身村名はシェルバ族のいう意味でのクラン名には対応しない（Oppitz, 1974）。

19世紀の中ごろ、クンプ地方にジャガイモが伝わったことによってクンプの人口が増大したことが、ダーズリンその他へのシェルバの移住を促すことになる。Furer-Haimendorfによれば、クンプ全体で1836年には169世帯しかなかったが1957年には596世帯となっている（Furer-Haimendorf, 1984: 14）。20世紀になると、イギリスの開拓したシッキムルートがインド・チベット間の交易のメインルートになり、クンプの中継ぎ交易の隆盛はかげりを見せ始めるが、これに決定的な打撃を与えたのは1959年のチベット動乱であり、これによってチベット交易がほとんど量的に意味をなさない程度に激減した（鹿野, 1972）。

ナムチェ村の古老ゲルツェン氏によれば、「村を作ったのは4代前の祖先のときで、およそ170年くらい前のことである。ナウジェとは森を意味し、もとは森に囲まれたところであった。かつては今より高いところ、すなわちクムジュンやクンデのような土地にすんでいたが、水をえて住み着いたのである。当時の村の構成員は、西方の谷のターメ、東方の谷のクムジュンの住民が多かった。かつては二つの谷の間は、川沿いの細道でつながっているだけであった」。彼の祖先の場合は、パンボチェの男とターメの娘が結婚してナムチェに住み着いたのである。また、彼によると「昔は、今他の村で存続しているように、夏と冬で居住地を替えることもしていた」とのことである。

以上のことを考え合わせると、ナムチェの村の発生当時の状況は、次のように考えられる。クン

ブ地方、特にナムチェより標高の高いところにすでに幾つもの村落が一定の自然条件を確保した生活圏を持って存在しており、それらの村々から移ってきた人々が、森林であったナムチェを切り開いて住み始めたのである。当時の人々の経済が、農牧生産を中心とした自給的性格が強かったものとすれば、森に囲まれたナムチェは、まず初めに上方の村の住民の耕地や採草地、冬放牧地として開かれたのではない。ナムチェの発生は、村々が共同利用していた林間の小テラスの独立として推測できる。現在のナムチェには、他の古い村と違って一定の生活圏がなく、その行政域は極端にせまい。この背景には、他の村が発生した頃とは違ってクンプの未開発地域は牧畜に適した高地には既になかったこと、今でも特定のクランが高山放牧地などをクラン共有地として占有する例が残存しているように、もはや既得権を握った古い村々の領域内には村人の利用地を獲得できなかったことが推測される。ゲルツェン氏の祖先は村の中央に大きなチョルテンを建てた。付随する家屋が恒久的なものにかわり、現在ナムチェ村の回りにあるいくつかの宗教施設が作られ、最初の村人たちの祭礼がそこで行われるようになったとき、ナムチェは村として生まれたのではないと思われる。

Furer-Haimendorfによれば、1828年にすでに、グルカ王朝はナムチェを中心とするクンプ住民の交易活動の規則をもうけていた。その規則によれば、11月から5月の間交易は自由だが、峠ごとに都合の良い6から10月は、ナムチェバザール以外で交易することを禁止している。チベットからの商人はナムチェバザールより下方に進むことは許されず、商品はナムチェバザールにてシェルバに売らなければならない。また、ソル地方などの低地のものは直接チベット交易をしてはならず、クンプの村々の長（pembu）の管理下でしか交易できない規則になっていた。このような規則のもとで、ソルのシェルバの中にはこの規制をなくすよう政府に申し入れても聞き入れられず、ナムチェの住民と通婚することによってチベット交易の自由を勝ち取った者もあったという（Furer-Haimendorf, 1975: 61-62）。このような事実は、村の歴史の始まった頃から、ナムチェはクンプ地方の交易センターとしての性格を備えていたことを示すものである。確かに、ナムチェは他の村々とは異なった性

格を当初から備えていたようである。このことは、単なる農牧生産経済の空間的拡大の地として、ナムチェの発生を推測するだけでは不十分であることを示唆するものかも知れない。

(2) チベット交易、定期バザールの開設

村の年輩たちによれば、「チベット交易の盛んな頃は、チベットから安い羊毛を運び、ナムチェで絨毯に織って、南方で売っていた。そのほかにチベットから入ったものには塩があった。輸出していたものはゾウと穀物程度のもだった」という。インドからの道路ができる前は、カトマンズ盆地などもチベットからの塩の流通圏であったことが知られている。また、Furer-Haimendorfによれば、1930年代までは、チベットへのもっとも重要な輸出品はクンプより低地で産する鉄であったという(Furer-Haimendorf, 1975:62)。

チベット人の移入に関しては、「チベット交易が大打撃を受けた1959年のチベット動乱以前に移入したチベット人(いわゆるカムバたち)は、借金を抱えたりしてチベットを逃げ出してきた人たちである。そういう人はほかの村にも多かった」という。彼らは、シェルバ族に雇われて労働者となることが多く、屠殺などを請け負っていたものもある。シェルバ族との間の通婚もなされ、村の中での役職にもつき、交易上手なため財をなす者もあって、社会的、宗教的な差はほとんどないが、シェルバ族より少し低い身分のものと思われる。

ゲルツェン氏によると、「週に一度のバザールが開設されたのは22年前のことであり、1967年くらいに当たる(Furer-Haimendorfは1965年に地元のパンチャヤートが定期市開設に動き出したとしている(Furer-Haimendorf, 1975:75))。それ以前には今の定期市はなかったが、村人は交易相手(ネーツァン)は持っていた」という。「今のナムチェの人口はシェルバだけでも700人くらいいるが、当時の人口は400人くらいしかなかった。そのころは今のような観光・交易はなく、みんな貧乏だった。多くの人、最近になって裕福になってきた。そのころ金持ちだった2、3軒の家は、やはり交易で儲けており、交易の他に、金貸しをやっていた。クムジュンやクンデなどに、家も土地もたくさん保有して、人を雇って耕作させていた」という。(ただし、調査結果によれば、現在のナ

ムチェのシェルバ族人口は500人余りである。)

今回の調査中、ナムチェの村はズレで毎週土曜に開かれるバザールを訪れたとき、約3分の1の売り手の者から、居住地、民族名を聞き取り、主要な商品をメモした。時間が限られたためデータは不十分で、また居住地名の同定も終わっていないのだが、それをまとめた表1に見られるように、商品の多くは南方のソル地区のライ族やシェルバ族、タマン族などが運んできた日用品、肉、穀物、野菜であって、クンプ地方、特にナムチェより上方の村人はほとんど売り手としては現れない。正確には確認してないが300から400人の売り手が参加していたであろう。商品の種類ごとに売り場が異なっているが、聞き取りはできる限り各売り場を回るようにした。売り場の近くには無料の宿泊所があり、前日に荷を担いで到着した売り手やポーターたちが宿泊可能である。調査の帰路、ナムチェから南方に一日行程の距離にあるルクラまで歩いた日は金曜であったが、ナムチェでの定期市の前日であったために、ナムチェへと向かって荷を背負って歩く人の列が多かった。彼らの接近路であるドード・コシ沿いの道は、そこそこに宿屋、茶店が発達していた。なお、バザールに参加する売り手は一つの荷物あたり10ルピーの市場税をナムチェのパンチャヤートに納めている。この市場税と運搬費のために、物価は低地よりはかなり高いようである。

バザールは年を追うごとに規模が拡大してきており、この発達には後にふれる観光化も影響している。1973年8月の鹿野の調査によれば、当時の売り手数は60から80ほどであったから、現在の5分の1程度にしかならなかった。近年も継続して調査している鹿野によると、品目は、1973年当時はシェルバの主食である穀物が圧倒的であったが、外国人観光客が増大するにつれ、彼らの需要に充てられる加工食品、卵、ケロシンなどの品目が多くなったという。また、バザールが持つ機能としては、クンプ各地から人が集まってくるために、バザールの場合はシェルバ族の間での情報交換の場、社交場として、社会関係を維持強化する上で不可欠の場となっているという(鹿野, 1989:102)。

(3) ナムチェの観光基地化

ネパールの地方行政において、パンチャヤート制が導入されたのは1963年以降である。それまで

表1 ナムチェ・バザールにおける売り手の居住地、民族、商品の例

地方	村名	人数・民族	商品
クンプ	* ターメ	3 シェルバ	茶類、砂糖、岩塩
	* クムジュン	3 亡命チベット人	刀剣、バター、衣類
	* ナムチェ	2 シェルバ	バター、野菜
	* モンジョ	3 シェルバ	野菜、サンショ、ネギ
	* リミジュン	2 シェルバ	サンショ
	* トクト	1 シェルバ	紅茶
	* バクティン	2 シェルバ	バター
	* チャウリカルカ	1 シェルバ	ネギ、ソバ、サンショ
	* ルクラ	2 シェルバ	餅、たわし、日用品、紅茶、ビール、菓子
	* チャプロム	1 シェルバ	バター
	クキシンド	1 シェルバ	バター、ヨーグルト
	ディンブー	1 シェルバ	バター
ソル	* デウサ	3 ネパリー、ライ	菓子、ラーメン、ビール、鶏卵、紅茶
	* スビン	4 ライ	ビール、鶏卵、石油
	* アイシェルカルカ	3	ビール、鶏卵、紅茶、菓子
	* ロキム	3 ライ	牛肉
	* マレリ	2	紅茶、小麦粉
	* ナムロン	2 ライ	小麦
	* チェスカン	7 ライ	小麦、トウモロコシ
	* ワク	2 ライ、シェルバ	ミレット(シコクビエ)、小麦
	* ブン	8 ライ	米、トウモロコシ、小麦
	* ソクン	4 ネパリー(ダマイン)、ライ	トウモロコシ、トウガラシ、鶏卵、米
	ロキュー	1 ライ	石油
	ゴーラ	1 シェルバ	ビール、鶏卵
	チュト	3 シェルバ	トウモロコシ、小麦
	アークラ	4 ライ	麦類
	カスタフ	1 ライ	香辛料
	ゴルタ	1 ライ	バナナ
	オプサカニ	1 マンガル	茶類、砂糖
	バサ	4	トウガラシ、ミレット、小麦
	アンバ	1 タマン	貯蓄池、石油
	ベルマ	1 ネパリー(ビシュヴァカルマ)	米、小麦
	グデル	1	バター
	オクサ	1	ビール、鶏卵
	ラーコーラ	2	麦類
	オカドゥンガ*	2 シェルバ	砂糖、小麦粉
	コタン *	1	牛肉
	カトマンズ *	1	仏具
	ケルン	6 タマン	香辛料、小麦粉、ビール、鶏卵
	ロディ	1	紅茶、ビール、菓子

? 記号はどのディストリクトに属するのか確認できていないもの

* 記号は地図上で地名を確認済みのもの

クンプでは、実質上村の住民の運営組織が村政を司っていた。クンプ地方は、二つの谷に対応するように二つのパンチャヤート(ターメ・ナムチェのパンチャヤートとクムジュン・クンデのパンチャヤート)に分かれている。パンチャヤートの境域はかつての自然村より広く、それらを包摂するように設けられた。ナムチェ村の属するターメ・ナムチェのパンチャヤートは9地区(ワード)からなるが、ナムチェ村に属するのは3地区(ワード)である。この3地区は自然的な村内の地域区分である3地区(1:ユル・デバ、2:ユル・パロア、3:ユル・メバ)にあたる。この境界については図3に示した通りである。

ゲルツェン氏によれば、「かつては多くの家がワード3(ユル・メバ)にあって、1、2には余りなかった。ワード1・2(ユル・デバとユル・

パロア)に家が建ち始めたのは比較的近年になってからである」という。ワード3は扇形の村の最下部を占め、それから上にワード2、ワード1と続くが、家屋は人口が増えるにつれて、上方へ広がっていったことが知られる。これは、バザールの発展にともなって、定期市のたつ付近に市の日だけ開店する茶屋、飯屋が広がったこと、特に1970年代後半以降、ナムチェ村民のロッジ経営や観光業関係による収入が増え、観光客の多い時期にはしばしばロッジ、茶屋としての機能を果たす家屋が多数新築されていったことによる。70年代には既存の家屋の増改築が多かったが、80年代になってからは新築ブームの様相を呈し、村から20分ほど上った水の得にくい丘の上、チョルカン(Chorkang)にまで家が建ち始めた。ここには現在8軒の家が建っている。村人によれば、ロッジ経営

が本当に盛んになったのはこの5年くらいのことであるという。現在ロッジにも使いうる立派な新居を立てるのには、30万ルピー（約150万円相当）ほどかかるということである。

Pawsonらによれば、60年代後半にルクラ飛行場が開かれるなどして接近が簡単になったことにも促されて登山隊やトレッカーは徐々に増え、70年代後半の1975年から79年には年間3500人から4000人、80年代に入ってから年間5000人前後の外国人観光客がクンプ地方に入ってきている(Pawson et al. 1984)。現在すでにナムチェはクンプ地方の観光拠点となっており、村人の多くは、観光客向けの商店・ロッジ経営、ガイド業などを行っている。村人にとっては、観光客の落とす現金収入が、大きな収入の途となっている。ここ20年間に、ナムチェ村民の平均収入は観光によってかなり上昇した。村人によれば、「かつては生きてゆくために人に雇われて、現在ナムチェ村で雇われている使用人たちのような仕事をせざるを得ない者もあった。その頃に比べればたいへん豊かになった」という。

以上、ナムチェの歴史を振り返れば、村の発生の頃から今世紀前半までは、チベットとの交易が生業の中心であったが、今世紀後半の村の経済構造の変容はクンプ地方唯一のバザール（週一回の定期市）の発達と観光基地化の進展を軸にして展開したと言えるであろう。

（4）家畜管理制度－ナワの消滅

さてここで、交易や観光だけでなく、農牧にも関連する家畜管理制度の変化をおさえておきたい。ゲルツェン氏は次のように指摘する。「60から70年前まではナワと呼ばれる役職の人があった。これは毎年顔ぶれが交代する役職で、村全体の家畜の移動と農地の保護のための管理役として2人が選出されていた。特に給料を貰うわけではなく、また、家系などにはさほど関わりなく村の構成員のなかで持ち回りされる役職だった。ナワは、畑に農作物が育っている5月から10月にかけて、家畜を高地にあげる期日やおろす期日を決定し、その間は家畜を村に近寄らせなかった。ナワはそれを村人に守らせ、規則を破った者を罰することや、家畜が畑に入って作物を荒らしたときには、損害を受けた畑の持ち主と損害を与えた家畜の持ち主の間の裁定をした。他村のものが畜群をつれて村

に近づくときには、その畜群の利用地を制限した。しかし、このナワ制度は、ナムチェでは乳ウシを常に家におくことが始まったために、なくなってしまった」。また、ほかの意見もある。「ナムチェでは、荷運びのために家畜を多用するため、夏の時期といえども家畜を村にまで下ろさなくてはならなくなったため、ナワの制度はなくなった」というものである。家畜管理のナワは、Furer-HaimendorfもShingo-nauaとして記録しているもので、クンプ・シェルパのどの村でもあった制度であることが知られている。また、この家畜管理制度は、今でもターメ、クムジュン、クンデなど、ナムチェ以外の村では厳格に行われ、ナワが活躍していることが知られている。

これに似た畜群管理制度は、ブータン北部にも、また、アルプスにも見られることであって、トランス・ヒューマンスを行う社会、あるいは農牧社会において、農・牧双方の利益確保の必要から、地域を問わず生まれてくるものであろう。今回の聞き取りでは具体的な問題の発生から解決（制度廃止）にいたる具体的な過程が明らかになっていないが、次のことが指摘できるであろう。各世帯において（牝ヤクも含めて）乳ウシを高山放牧する意味がなくなる状況（頭数が少ない、人手がない、共同放牧などの社会的管理に失敗する、など）や、牡ゾウを初めとする荷役畜が夏季においてもナムチェで必要とされる状況が起こった可能性が高い。

ただこの際重要だと思われることは、ナムチェ村には高山放牧地がなく、他村の行政区域に求めなければならないが故に、少なくとも村が発生して住民の生活の中心になって以後は、夏季に高山放牧を必要とするヤク、特に牝ヤクを数多く飼養し続けたとは考えがたい。また、ナムチェからの輸出品がゾウであり、交易の輸送力として家畜の意義が大きいことからすれば、古くから一貫してナムチェの主要な家畜種はゾウであった可能性は高い。これが確認できる一つの例は、チベット交易がまだ盛んであった1957年にFurer-Haimendorfが記録したクンプ地方各村の家畜頭数データである。それは表2のとおりである(Furer-Haimendorf, 1964:5, 1975:45, 56-59)。

表中の数値に問題を感じるところがないわけではないが、表によればナムチェより上方の村落では牝ヤク（ナク）の数が多いのとは対照的に、ナ

表2 クンプ地方の家畜種とその村による違い (Furer-Haimendorfによる)

Village	[Houses]or H-holders	Cattle- Owners	male yak	female yak	male zoe	female zoe	common ox	common cow	Total
Khumjung	108 [93]	33	14	333	24	15	13	56	488
(in 1971)			(32)	(194)	(39)	(98)	(13)	(40)	(432)
Khunde	[45]	28	2	316	35	2	17	16	416
Tengboche	-	1*	-	23	4	2	1	0	31
Milingbo	[18]	5	2	20	-	3	-	8	38
Pangboche	[58]	33	2	228	7	2	3	12	287
Phortse	59 [63]	36	16 or 39	454	-	-	8	17	531
(in 1971)			(109)	(240)	(5)	(7)	(?)	(?)	(?)
Namche	73 [73]	28	-	40	238	50	1	48	405
Jaro	?	3	1	25	-	-	-	4	33
Thamichok	[192]	91	2	647	79	27	27	72	945
(in 1971)		(117)	(46)	(618)	(140)	(32)	(30)	(123)	(1106)
Total	596	258	39	2086	387	101	70	233	3174

*All the cattle of Tengboche belong nominally to the abbot of the monastery.

ムチェでは牡ゾウが多く、牝はゾウ、ウシ、ヤクが同じ程度になっている。すでにこのころには村によって牧畜のあり方も異なっていたのである。

さてここで、今のナムチェでの肉の供給についてふれておきたい。かつてシェルバ社会の中では、彼らは仏教徒であるがために、チベット人（カムバ）でヤワと呼ばれる身分の低いものがヤクやウシの屠殺をしていた。ブータンでも屠殺者はチベット人が多く、またチベットでは、異教徒である回教徒が屠殺をしていた。チベット世界のどこでも、よそものにやらせようとするようである。しかし現在はシェルバもヒンドゥー教を国教とする国家に属し、ウシを殺したことが発覚すると1頭あたり500ルピーの罰金をとられる。殺すときには家の一階で夜中に殺したりするのだという。肉の種類についてはヤクやゾウの肉は今や高価であり、低地から連れてこられた牡ウシのほうが安く出回っている。村はずれの森の入り口のナムダセリと呼ばれる場所が屠殺場となっており、屠殺の免許を持っているライ族やタマン族が週に1、2頭殺している。バザールに出回ったりするのもこれである。

(5) 森林管理の変化

村の森林管理についても、ふれておく必要がある。ゲルツェン氏らによれば、「昔から森林管理に関わる制度として、タールックというのがあった。これはナワとは違って現在でもいちおう存続はしている。かつての主な役割は税を集めることや、木を伐るものの取り締まりであった。タールックは、ナムチェに1人、ターメ、クムジュン、クンデには2人ずついた」という。以前は村落近くの森は数区分され、管理されていたという。すなわち、村のすぐ近くは伐採禁止の地域で、それよりさらに離れたところが建築用材をとる場所、さらに下方の森が、燃料とるための森で、そこはいつでも誰でも自由に採りに行って良かったという。近年森林の保護と育成を目的とするナショナルパークができ、森林管理もかつての制度とは違ってきている。

Pawsonsらによれば、ナショナルパークは1976年に設立され、現在約60人の森林監視員がいるという(Pawsons et al., 1984)。パークの範囲は入域チェックポストがあるゾルサレより上流の全水系であるため、ナムチェ及びクムジュン両パンチャートはすべてこのパークに属している。1980年頃にナムチェの上、メンドルフの丘に立派な施設ができ、森林管理は本格化したようである。ターシ

ン（もみ）、メタン（松）などの成木を許可なく伐ると一本あたり500ルピーの罰金をとられるという。建築用に生木を切り倒すためには、パークの監視員から許可を得ねばならない。立派な成木は一本あたり75から80ルピー支払わなければならないという。最近にはパークによって植樹もされており、石垣で囲って植樹した場所には、家畜も人も立入禁止になっている。

5. 生業の現状とそのなかでの農耕、牧畜

（1）調査データについて

今回の調査結果によると、ナムチェのシェルパ、あるいはシェルパ・ティベタン世帯は（未調査のものが1,2あるかも知れないが）104戸ある。調査では、われわれ自身が村人を訪問して進める聞き取りと並行して、手助けを依頼した村の若者によって世帯ごとの基礎情報が寄せられた。これによって、全世帯ごとに、家族員数、年齢、成員ごとの就業内容、リネージ、所有する土地（畑と採草地）の面積と位置、副住居の数に関する情報を集めたのである。その結果は、基礎データ表にあるとおりである。世帯ごとの働き手については、修学中の若者（多くは20才未満）や臨時雇用の使用人などは加えてない。使用人の数は長期雇用のものだけを数えてある。就業分野の項目については、各世帯の収入源として生業のどの分野が重要であるかという順序に従って、生業の項（T&Eなど）を記している。ただしこれは、収入額などの量的目安に基づいて判断したものではない。

また、全世帯の約3分の1の34世帯については、家畜所有や、土地の相続・貸借、年間収入と収入源についても情報をえた。基礎データ表2は、その34世帯分のデータをまとめたものである。この表では、就業分野は収入額を合わせて示してある。

上記の2種類の世帯別データの収集においては、各世帯の耕地所有面積は、平方ドンバ数に従って聞き取った。シェルパ族が用いるこの単位では、1ドンバは両手を広げた長さである。耕地区画のタテ・ヨコのおおよその長さを掛け合わせることで、耕地や採草地一筆ごとに何平方ドンバあるかが示されることになる。しかし、今回重複して聞き取った数値が違っていた例が幾つもあり、ドンバ数による把握の仕方は村人の間でもかなり大ざっぱな目安にしか考えられていないのではないかとと思われる。目安のために考えてみれば、1平方

ドンバは約1.5平方メートルほどであるから、100平方ドンバの耕地といっても1.5アールほどでしかない。

チベット世界では、耕地面積は播種量によって表現されることが多い。ケルという重さの単位があり、1ケルは13.5キロに相当する。播種量が何ケルかによって、面積を表現するのである。耕地のもつ土壌の質によって面積あたりの播種量は大きく変化するため、この数字も耕地面積を正確に反映するものではない。しかし、おおよそ、7.5ケルが1エーカーに当たるといわれている。さらに、耕地の善し悪しについては、収穫量が播種量の何倍かということで認識される。チベットの場合、作物はおもに大麦であり、その数値についてもさまざまな報告があるが、河口慧海は、ラサ付近の耕地について普通の耕地で4から6倍程度、秀れた耕地で8から10倍程度としている（Dargyay, 1982:103; Goldstein, 1981:13; Carrasco, 1959:9; 河口, 1978:129）。

シェルパの間で使われている重さの単位には、ツォンと呼ばれるものがある。1ツォンは約6キロである。ある耕地を前にして、ナムチェの村民にその面積、播種量、収穫量を聞いた例をあげると、それぞれ200ドンバ、10ツォン、60から70ツォンであった。今後の調査の段取りからいえば、各耕地の面積を写真測量等で把握し、播種・収穫量を聞き取ることで耕地ごとの生産性を正確に評価しようということになる。

さて本題に戻り、以上に述べた理由から今回のデータの中のドンバ数はある程度の誤差を含んだ数値として理解した方がよいであろう。また、村での各世帯の聞き取りの時点では、村から離れた所有地の地名は漏らさず確認しようとしたが、実際にナムチェ村行政区内を歩きつつ、耕地・採草地のある個々の小地名を持つ地点にてガイドを頼んだ若者から聞き取った所有者名が、村で聞き取ったデータ中にはないことがあった。そのため特にナムチェ村からその行政区界にいたる範囲の土地に関しては、すべての所有者とその面積を把握しているわけではない。ざっと見積もって、個々の利用地ごとにみていけば、6から7割程度にしか世帯と面積を把握していないだろう。残りの世帯は、このナムチェ～行政区界間の利用地の面積の多くをナムチェの私有地の中に含んでしまっているであろう。これが生じた理由としては、村民

がナムチェ内の土地にこれらを数えてしまっている、面積が狭くとるに足らないなどが考えられる。

(2) 世帯ごとの就業構成と農耕・牧畜

(1) 就業分野と働き手の属性

基礎データ表1・2をみれば、各項目ごとに世帯差があることが目につくが、全体として一般的に確認できることを指摘しておきたい。

煩雑になるため、どの表にも世帯成員ごとの就業分野の違いは示していないが、ナムチェでは、男女間の労働分業は比較的是っきりしていることを述べておかななくてはならない。交易、ロッジ経営、トレッキングガイド、荷運び用のゾウの群れの世話などは男の仕事である一方、女は、家事を始め、畑仕事、機織り(カーペット)、編み物、茶店・食堂経営に従事していることが多い。

基礎データ表1・2からは、現在のナムチェの多くの世帯において、もっとも大きな収入源が農耕や牧畜ではなく、観光に関わったものであることがよくわかる。ただし、世帯内の働き手の年齢が60才を越えるような場合は、交易、機織り、農耕、牧畜などがみえる。これの多くは、高齢者が担ったものである。彼らほとんど観光関係にはタッチしていない。高齢者のいる世帯で観光関係に従事者がいる場合は、次の世代のものが担っているのである。すなわち、ロッジ経営やトレッキングガイド業は大体50才前後以下の男の仕事である。特に20から30代の若い男の場合は、教育を受けているために英語もでき、多くがガイド業についている。高齢者の就業分野は、観光の時代を迎える前のナムチェを想像させるものといえる。こういった時代変化は表には十分現れないが、次のような具体例に見ることができる。村人によれば、世帯番号62、84、57の3戸は現在ナムチェでもっとも富裕な世帯であるが、その世代・成員別仕事内容は次の通りである。

- 62：家屋(ナムチェ2、カトマンズ1)
私有地(350) 使用人(女1)
：70代老夫婦：チベット交易(引退)、
商店経営、機織り、耕作
30代息子：チベット交易
(ラサにて絨毯工場経営)
84：家屋(ナムチェ2) 私有地(210)
使用人(男1)
60代老主人：放牧、ミルク・バターの交易、

輸送用のゾウの貸出

- 60代婦人：食堂経営、耕作
20代息子：トレッキングガイド、
交易、農耕、
20代娘：セーター編み
57：家屋(ナムチェ5) 私有地(340)
使用人(0)
40代夫婦：ロッジ・食堂経営、
トレッキングガイド、耕作、
家の賃貸し、ゾウ輸送、
20代息子：ホテル従業員(カトマンズ)、

世帯番号62の老人の場合はチベット交易によって財をなした商人であって、ナムチェ以外のラサやカトマンズにも家屋等の財産を持っており、息子もそれを利用した交易業を引き継いでいる。世帯番号84の場合は家畜が多く、商品化可能なゾウの飼養、肉や乳製品の生産、ゾウのもつ畜力などは、かつてから交易関係の収入をもたらし財源であったが、近年は交易に加え、ガイド業と食堂経営をしている。世帯番号57の場合は、ナムチェにおけるロッジ経営を初期に始めた例であり、5戸もの家屋を所有する。大がかりなロッジ経営に合わせて、家屋の賃貸しもしている。いずれの場合も私有地面積は大きく、婦人達が耕作を受け持っている。村の中間層とこれらの世帯の違いは、まず私有地の面積にみられる。働き手の数などではそれほど違いはないが、私有地面積は、50から100ドンバ程度の世帯が多い。すでにみたように、100ドンバの私有地があったとしても、ジャガイモ畑なら年に200キロからせいぜい300キロ程度の収穫量しかなく、採草地に利用しても、約800キロ程度の干し草(10頭程度の家畜の冬の飼料)にしかならない。

(2) 観光関係への依存

基礎データ表1に見るように、平均値によると、一世帯あたりの家族内の働き手は2.6人、使用人0.6人である。多くの世帯では、家族メンバーの内の働き手は、30から50代の夫婦2人のみであるか、あるいはそれに次世代あるいは前世代の者1人が加わって3人になっている程度である。使用人を加えても、世帯全体での働き手の数が3人以下の世帯が、実に104世帯中64世帯にも上る。2人以下でも30世帯を占めている。これほど働き手の少な

い世帯の多い理由の一つは、老夫婦が50才を越えても息子がカトマンズで修学中であったり、そこで職を得るなどして、次世代の後継者が流出してまだ帰ってないことが多いためである。そのためにナムチェ居住者の年齢を見れば20才未満の若者は多いのに、2,30才代の若者、特に男が少ない。これが使用人を必要とする理由の一つであると思われる。

しかしそれに比して、その少数の働き手が担っている仕事の分野は多い。観光客の多い時期には主人がトレッキング関係の仕事をし、主婦が食堂、茶店、編み物などの仕事をしている。夏のモンスーン季は、観光客は少ない。この時期には農事は婦人が受け持ち、主人は交易・旅行関係の仕事でカトマンズなどへ出ることもある。このような労働のあり方が、働き手が少ないにも関わらず多様な就業分野を生んでいるのである。

これらの世帯でも首位におく分野には微妙に違いがある。観光関係でも、大登山隊のサダー、登山シェルパ、トレッキングガイド、ロッジ経営、ゾウ輸送、コックなどのどの分野に就くのかによって、収入も、働く場所・時間も違うのである。基礎データ表2にもそれが現れている。働き手の少ない世帯の主人がどの分野に就くかは、その土地面積や家畜頭数といった世帯の持つ農牧生産条件とも関わっているはずだが、また一方、登山隊のサダーの場合は経験と社会的な実力を要求される為に特定の年齢と経験を積んだ者しか就けないようなこともあり、個々人がどの分野に経験をもち、どの程度習熟しているかという条件も絡んでくる。

しかし、一般的にいえることは、旅行者の多い時期がはっきりしているから、クンプ地方の中で働くような観光関係の仕事である限り忙しい時期は限られ、それ以外の時には家の仕事や村の役職などを果たしやすい。このために男の働き手が主人一人に限られるときには現地での観光関係の仕事が効率がよく好まれ、しかも彼の就業分野は観光関係の中でも特定の分野に片寄ったものになりがちである。血縁関係などを頼って互いに集まり、組合の系列にも似た協力のネットワークをつくってさまざまな分野を担当しあうことが多い。近年、旅行業代理店による就業関係の系列化が始まっているが、これも血縁ネットワークに関わっていると思われる。また、外国人観光客以外の住民も利

用する常設のロッジ・食堂などを経営する者をのぞけば、観光シーズンには特に主人は家から離れることが多いために、春先からの耕地の世話や年間を通じての一家の守り手は主婦の役割となる傾向が強い。

以上のように、現在のナムチェの経済状態は観光や交易という村や地域を越えた外部との関係を無しには説明しがたく、外部の経済に対する村民の対応の仕方は複雑で、単純には示せるものではない。その様相を端的に示すのは、土地や家屋の賃貸しや、一家を挙げてカトマンズで生活している例(16,28)などであろう。これらの例が村の中の経済に持つ意味はまだ十分に把握しえていない。しかし、家屋の賃貸しは、複数の家屋を持つ世帯(34,38,60,1,73,74,90,93,104,107,117:基礎データ表2参照)に限られ、そのほとんどがネパリーやチベット難民の世帯や、公的機関(銀行、郵便局など)に貸されたものとなっている。土地の賃貸し(14,27,28,34,57)は私有地面積が多いながらも大がかりなロッジ経営をしている(57)とか人手が少ない(14)世帯にみられほか、所有面積は多くなくとも女手がない世帯(27,34)、カトマンズにすむ世帯(28)のみに限られている。全世帯数の約3分の1にあたる、比較的詳しく調査しえた34世帯についても、基礎データ表2にみるように、土地を貸しているのは2例に限られる。他の大半の世帯は、額は少なくとも農業生産による収入をあげている。このことから、村内とその近くにもつ私有地(畑、採草地であるが多くは畑)はやはり耕作や採草に利用されており、村に住みかつ女手がある限り、村民は世帯の中で農耕を維持しようとする傾向を読みとることができる。

(3) 小規模農耕の維持

就業分野別の収入額を基礎データ表2で見てもわかるように、村全体の所得をみたとき、ナムチェの生業の中心は明らかに農耕にはない。観光関係や交易にたよって、生きている村である。しかし、どの世帯でもいくらかの土地を所有し、就業分野の中に農耕を含んでいる。世帯ごとに専門分化しているのは、農耕ではなく、観光や交易の中でどのような種類の仕事に就いているかということに見られるのである。すなわち、ほとんどすべての世帯において首位たる就業分野である観光関係・交易は主人が担いながら、所詮副業にしかすぎ

ない農耕を、女達がやっているのである。女手といえども働き手は多くはなく、また多くの世帯は耕作面積も少ない。そのため主食としてのジャガイモを十分確保しているとは思われない。一般の世帯では、バザールで購入したソバ、小麦粉、シコクビエを粉食して朝食、昼食としている。

多くの世帯では、すでに農業収入の割合は小さく、農耕を捨ててもいいようにさえ思えるのだが、そうではない。村での耕地開拓はすでに限界にきており、所詮副業でしかない農耕しか営めないとしても、各世帯がわずかの面積でも耕地を持ち耕作していることに意義を見るべきであろう。観光や交易に依存した生業様式といえども、その基底には、農耕生産があるといつて良いであろう。

このような少ない女手によって農耕がなし得る理由には、女達でつくる共同労働交換グループであるガロックや、使用人の雇用によって、農繁期でも労働力を確保しうることがあげられる。また、旅行者が増える前の時期に早めに収穫してしまうこと、ジャガイモの耕作は世話が余りかからず男手が必ず必要であるというわけではないことなどがあげられる。

(4) ゾウ飼養の維持、私有地面積と頭数の関係

さて牧畜についてはどうであろうか。家畜の飼養頭数については、基礎データ表2にあるように、村の約3分の1である34世帯しか聞き取っていない。しかしここでも農耕と同じことがいえそうである。表に見るように、34世帯中ゾウやウシを持たない世帯は4世帯にすぎない。一方、4頭以上持つ世帯は20世帯であり、それらはほとんどがゾウを観光業関係の輸送に使うことでかなりの現金収入を得ている。また、1世帯(14頭)をのぞいて頭数は10頭未満であり、特定の世帯にのみ所有が集中することにもなっていない。全世帯の調査データでは、世帯の主たる就業分野の中に家畜関係のゾウ輸送や放牧をあげていた世帯は104世帯中24世帯しかなかったが、これは、データ収集上の問題であろう。多くの世帯はそれをトレッキングの項目(T & E)の中に含んでしまっていると考えられる。

ナムチェの場合、自家消費分以上にバター・肉を生産しうほどの規模の牝ゾウ、牝ヤク等の群れを持っている者は少ない。1、2頭の牝ゾウを所有すれば、自家消費用に最低限欲しい程度のミ

ルクは獲得できる。また、牝ゾウの場合は、数頭しか所有せずとも他人にめんどろを頼んで観光・交易関係に輸送力として提供しただけで着実な収益をあげ得る。数頭程度までであれば、狭いながらも村周辺の共有地に放牧したり、共有地、採草地などから冬の干し草を確保して飼養することは、平均的な世帯でも可能であると考えられる。

採草地での干し草作りが盛んであったことを考えると、私有地面積と家畜頭数の間に、一定の相関関係がみられても良いように思われるが、34世帯に関してそれをグラフ化した図7を見てみれば、相関関係はあるとはいえない。すでに確認したようにほとんどは3から7頭程度の間におさまっている。ナムチェほど観光や交易に依存しない農牧生産中心の村落であれば、相関関係はあるかも知れない。なぜならもっと広い耕地を持ち、大麦などを作っているところでは、犁耕、施肥、脱穀、採草、荷役などの点で、一定の頭数の牛類家畜を持つことが、農業生産にも役立つからである。このグラフをどう読みとるかは問題であるが、ナムチェの場合は農耕地も放牧地も限られており、自家消費分でさえ生産を確保するのが難しいことを考えれば、これに示される少ない部類の頭数・面積の所有が、村民が最低限確保したい量を示しているのではないだろうか。すなわち、村民にとって、最低限でも確保しておきたい家畜頭数は2、3頭であり、私有地面積でいえば、40から50ドンバなのである。ただ、平均レベル以上に土地を200ドンバ近く持ちながら家畜を持たず、300ドンバ以上持っても1頭しか持たないような例は、観光収入の増大によって、今やバザールなどから肉や乳を容易に入手できるようになったことにより、家畜飼養が必須ではなくなりつつあることを示すものかも知れない。また、14頭持っている例なども、高山放牧を行う者、雑種生産に携わる者が、一部の世帯に集中していることを示すと考えられる。

確認しておきたいことは、農耕における土地所有の場合と同じく、特定のものに家畜の所有がさほど集中することなく、大半の世帯で一定の頭数を飼養していることである。それを行うには、家畜放牧の委託や共同放牧などの社会的管理が行われている可能性が高い。この点に関しては今回の調査ではまだ十分把握できていない。先にみた1957年の時点でのナムチェの家畜は、すでに交易目

的という、本来の牧畜生産物の獲得という意義からはずれた家畜構成になっていた。極端に牝ゾウ飼養に片寄っていたのである。現在では、牝ゾウは商品として販売する目的の為ではなく、輸送力という価値のために飼われている。このように、飼養目的の重点は移動していると考えられるが、村全体の畜群構成は当時とさほど変わっていないようである。すなわち、搾乳用に牝ゾウ・ウシを少数持ち、交易・輸送用にそれより多く牝ゾウを飼うという構成である。また頭数についても、34世帯で145頭いることを考えれば、おそらく1957年当時より増えているほどではないかと思われる。

(5) 生業全体の中での農牧の意義

歴史と生業の項にみたように、かなり以前から現在に至るまでナムチェの生業の中心は、交易・観光であり、農牧にはない状態が続いてきている。しかし、少なくともここ数十年の間は、個々の世帯では農・牧は常に変わらず小規模なままでも確保され続けてきている（Furer-Haimendorfの資料の家畜飼養世帯数は少なすぎると思う）。交易（カーペット織りなどの工芸も含む）や観光が外部の地域、住民との経済的接触の中から生まれてきた、中心的な生業とすれば、農牧は、村とせいぜいその近くの隣村の中の自然を利用し、生計の維持には不十分な、いわば周辺的な生業であった。

なぜこれが強固に維持され続けられなければならないかということについて、今の時点ではまだ充分な説明できない。しかし考えられることとしては、交易などの外部経済との関わりは国家レベルの政治・経済的条件の時代による変化に大きく影響される。細かくいえば、特定の品目でも季節や地域による価格変動は利益に大きく影響するはずである。また、収益の上がる期間も、不定であることが多い。交易に頼って生き、かつ村に住み続けようとするナムチェ村民にとっては、常に足りない、わずかの農牧でも維持しておくことは、他の村より低いレベルの収入しか確保できないとしても、生活の最低限度の足場として確保せざるを得なかったのではないか。特に、交易品や乳ウシ、輸送畜として利点を持つゾウを保持し続けることは、この地方での輸送的意義が変わらず大きかったこと（チベット交易から観光化）によって、住民が時代の変化に対応する際に、多大の寄与をなした。チベット交易の盛だった頃から

一貫して、ゾウはナムチェ経済の中心にあったと思われる。農牧生産の維持、特に有効な家畜の利用は、ナムチェ経済の安定性を確保してきたと考えられる。

ここでは詳しく述べられないが、農・牧生産が、ともに貧しいながらも、常に外部と関わってゆく際の生業の基点としてあり続けることに、「農牧生産と無関係な形で交易に専業化しない農牧社会」としての、チベット世界に共通した生業上の特徴を見るように思う。

(3) 私有地（耕地と採草地）と副住居の広がり、その利用について

(1) 伝統的生業としてのトランス・ヒューマンス

初めにふれたように、Furer-Haimendorfや鹿野は、クンプ地方の他の村の伝統的な経済を、トランス・ヒューマンスを基幹に据えたものとしてきた。標高の異なる地点に耕地や放牧地を持って、季節によって家畜を動かし、人が頻繁に移動していわば垂直に土地利用を展開する山地移牧である。山岳地帯においては、その地形上の理由から、標高によって異なる自然ゾーンが近接している。この条件を逆に有効に利用して、時空間内でうまく土地利用と労働配置を行うものである。アルプスからヒマラヤ、中央アジアの山岳地帯、さらにはアンデスなどでも、これに類似の土地利用システムのあることが知られている。

たとえばクムジュンやクンデの村では、ドード・コシ近くのテシंगाTeshingaに耕地と冬の家を持っている人が多い。家畜は四季を通じて5000メートル近くのGokyoなどの高山放牧地から、クムジュン・クンデ付近、テシंगाへと移動し、適した時期に適したところへ放牧できる。また、年によっては上の村で作物が不作の時でも、下の耕地は不作でない場合があり、農業生産の上でもより安定した生産を確保できるという意義がある。

ゲルツェン氏の話にあったように、ナムチェの住民も、かつては夏と冬とでは住居を替えていたこともあった。しかし、それも行われなくなり、村での家畜管理の制度（ナワ）も衰退した。これには、高山放牧地のない狭い行政区しかないことに加え、また標高の低さにうまく適合した種であるゾウを選択をしたことが関係している。

ゾウはヤクほどには高地に強いとはいえず、夏季の高山放牧も必要不可欠ではない。このため、

トランス・ヒューマンスという季節移動する生産様式の発生を促す側面からいえば、ゾウは、種としては「移動を要求する家畜」としての性格は弱い。また、畜群の規模も各世帯で見ればまったく小さい。こうしたことからすれば、他の村や、ヒマラヤ高地一般のヤク農牧民にみられる放牧サイクルとそれに伴う人の移動が、個々の世帯の中で、あるいは村全体として、いったいどの程度行われているのかに関しては、疑問が生じる。

今回はナムチェ村だけにしか滞在しなかったために、放牧全般に関する聞き取りは不十分である。すでに9月初めには牦ヤク以外はすべて村付近に降りてきていたこと、ナムチェの家畜の種類、頭数についての情報から牦ヤクがたいへん少ないと思われることなどから考えると、多くの世帯において、村人が家畜の放牧サイクルに従って季節移動しているとは想定しがたい。むしろナムチェには人口の割に農耕地が少なく、冬のための干し草集めをせわしくやっていたことから考えると、移動放牧ではない、トランス・ヒューマンスの持つもう一つの利点である農耕的意義、すなわち私有地の作物栽培と採草利用による家畜飼養の側面のほうが、ナムチェ村民にとってはより重要なことと思われる。

(2) 私有地と家屋の広がり

図6は、各世帯がナムチェより外に持つ私有地と家屋を104世帯全体でまとめ、地点ごとの村からの大ざっぱな距離と土地・家屋所有世帯数をあわせて図示したものである。白抜きの星印は、ナムチェの行政区に属するが、村からは少し隔たった地点を示す。これをみれば、土地(畑、採草地)と家屋が、村境を越えて、標高の異なる地点にまでかなり広がっていることがわかる。ここでいう家屋とは、さきに述べた副住居に相当する。すなわち、主住居ほど恒久的な住居ではないが、農作業や畜群の滞在のための一時的居住と貯蔵などの機能を最低限あわせ持ったものである。家財は、滞在がどのくらいの長さにわたるか、観光客用の利用をするかどうかによって異なる。これらの私有地と家屋は、ほとんどがナムチェから歩いて2日以内のところにある。

表3では、家屋と私有地、それらの標高と村からの距離をもう少し細かく世帯番号ごとのデータを列挙した。さきにふれたように、ここ20年ほど

の間、ロッジ、茶店経営が増加しているため、農牧利用に関係のない家屋は差し引いて評価せねばならない。外国人観光客の移動するメインルートであるルクラ、ナムチェ、タンボチェ、ディンボチェ、エベレストBCという道沿いに沿った副住居(表中*記号のものは、旅行シーズン(3から5月と10から1月の二期)にはロッジ、茶屋として利用されているものが多いようである。土地の付属してない家屋はまずすべてそれであると考える。また、生活の本拠たるナムチェの村の中に複数の家屋を持つ世帯のほとんどは、それらを用いてロッジ経営をしたり、みやげ物屋店舗に貸し出している。ルクラやカトマンズに所有している場合の多くは旅行や交易に関係したものである。

ナムチェ104世帯のうち、ナムチェに複数の家屋を持つ世帯は29世帯にも達し、ナムチェ以外に副住居を持つ世帯は30世帯に達する。ナムチェ内外を問わなければ、実に約半分の51世帯が複数の家屋を持っている。これらのかなりの部分は近年の観光化にともなった建築ブームの結果である。

(3) 村外私有地の利用

しかし、村を離れた家屋の中でも、Tarnga, Thame, Zarokなどは、旅行ルートからはずれており、観光客目当ての家屋利用はなされておらず、近年の観光化の影響による新築家屋であるとも考えられない。基礎データ表2にも見えるように、ここ数十年間のナムチェ村民による家屋新築は、ナムチェと旅行ルートに沿うところ以外ではさほどあったとは思えない。一例を示せば、ある世帯(117)の場合は、ナムチェから急いでも1日でやっと到達し得る距離にあるタルンガTarnghaにジャガイモ畑を50ドンバ、副住居を一つ持っている。農作業や草採りのために家畜をつれてそこへ向かうときは、1日で到達しえないため、途中で宿泊せざるを得ない。そのためのテントなども用意して家畜に運ばせる。家畜を使って収穫物を持ち帰るほか、主に冬の干し草を貯蔵する目的でこの家屋を使っている。

近年クンプの旅行ルート沿いでは、旅行関係者を相手にした換金目的のために、畑や採草地で干し草、野菜などを生産しているという事例が報告され始めている(Cox 1985)。しかし、チサ(採草地)で商品作物として干し草を栽培することはと

図6 村からの距離と標高からみたナムチェ村民の村外私有地と村外家屋

* 地名の後ろの数字は（土地所有世帯数－家屋所有世帯数）をあらわす
 ☆は村の行政区内に属する場所である

Height	Distance	1day	2days
4,300			* Dingboche (3-1)
4,100			* Langmoche (2-0)
4,100			* Mingbo (1-0)
4,050			* Tarnga (7-3)
3,950			* Pangboche (3-0)
3,880			* Churyokpa (2-1)
3,850			* Tangboche (0-1)
3,800			* Thame (9-4)
3,800			* Khumjung (7-0)
3,800			* Yelajung (1-1)
3,700			* Mende (1-0)
3,700			* Syangboche (5-3)
3,600			* Samde (1-1)
3,600			* Samshing (2-0)
3,600			☆ Zarok (5or6-5or6)
3,520			☆ Nyarshe (4-0)
3,450			☆ Pherkep (3-0)
3,400-3,500			★ Namche Bazar (103-138)
3,400			* Phurte (2-0)
3,250			☆ Satarma (1-0)
3,040			☆ Tobdara (0-1)
3,030			* Tashilung (8or9-0)
2,850			* Luglha (4-5)
2,800			* Monjo (1-0)
2,800			* Rimi jung (2-1)
2,700			* Tsermanding (1-0)
2,650			* Phakding (1-0)
2,650			* Rangdingma (1-0)
1,300			* Kathmandu (3-8) by air

図7 ナムチェでの世帯の私有地面積と家畜頭数の関係

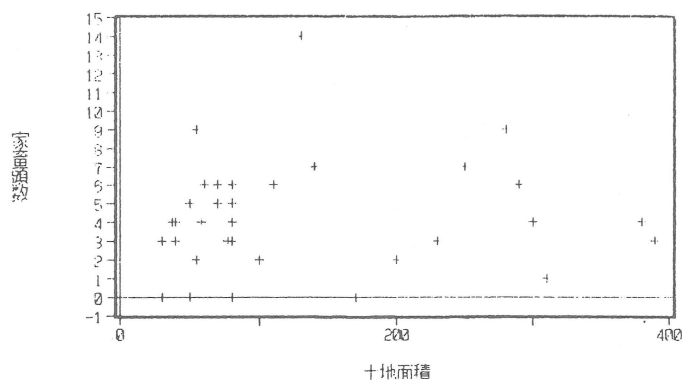


表3 ナムチェ村の村外土地所有と家屋所有

地名	標高	距離	地所有 世帯数	世帯No(面積)	地付き家屋 所有世帯数	地無し家屋 所有世帯数	世帯No(家屋数)	備考
Bindwiche	4300	15	3	54(72m ²), 104(50), 45(80)	*1	0	04(2)	
Lanzwiche	4100	14	2	29(30), 86(106m ²)	0	0		
Larnepa	4050	14	7	17(10), 2(30), 3(20), 4(20), 33(710), 39(90), 116(50)	3	0	2, 3, 116	
Mingbo	4100	13	1	75(53)	0	0		
Pangboche	3950	9	3	45(50), 57(60), 60(100)	0	0		
Yela Jung	3800	8	1	5(20)	1	0	5	
Thame	3800	7	9	5(20), 7(25), 8(30), 13(30), 17(50), 24(40), 27(25), 30(740), 31(20)	4	0	37(2), 24, 27, 30	
Lanboche	3850	6	0		0	*1	45	
Sunde	3600	5	1	54(95m ²)	1	0	64	
Samsing	3600	5	2	45(30), 58(30)	0	0		
Mende	3700	3	1	57(20)	0	0		in census land 4
Phurte	3460	1.8	2	1(10), 66(22m ²)	0	0		
Kumjung	3800	1.3	7	12(55), 27(80), 72(133), 78(50), 177(80), 40(80), 43(60), 57(80)	0	0		
Churyokpa	3880	0.8	2	51(100m ²), 95(20m ²)	0	*1	89	
Syangboche	3700	0.5	5	84(15), 62(50m ²), 77(23), 89(7)	*3	0	84, 77	in census house 2
Zorok	3600	0.5	5 or 6	80(740), 70(102m ²), 126(7)	5 or 6	0	80, 70, 126	in census house 2
Nyarshe	3520	0.3	4	83(710), 102(60), 121(50), 122(20)	0	0		
Phurkep	3450	0.2	3	11(20), 76(48), 120(30)	0	0		
NAMCHE	3400	0	103	省略 (126を除く全世帯所有)	103	ナムチェに	2, 3, 12, 13, 34, 38, 45, 46, 48,	
and						家屋2以上	57(5), 60, 60-1, 61, 62, 66, 71, 72,	
Chorkan	3450					ある29世帯	73, 74(3), 82, 84, 85, 90, 93(3)	in census land 2
Meshilung	3400					(家屋数)	100, 102, 104, 108, 122, 124, 109	
Joklara	3940	-0.8	0		0	*1	96	
Tashi Lung	3930	-1.0	8 or 9	96(130m ²), 97(30), 100(60), 101(30)	0	0		in census land 4
Satarwa	3250	-6	1	100(7)	0	0		
Monjo	2800	-3	1	57(52m ²)	0	0		
Rimi Jung	2800	-4	2	71(162m ²), 56(90)	1	0	71	
Bawalimze	2650	-4	1	56(50)	0	0		
Phakding	2650	-4	1	46(70)	0	0		
Tsermanding	2700	-5	1	60(120)	0	0		
Lukliha	2850	-8	4	103(49), 110(50), 112(30), 60(200)	*4	*1	82, 103(2), 110, 112, 60(2)	
Kathmandu	1300	-80	2	85(0.5Ropeni), 28(12), 48(1Ropeni)	*1	*7	28, 34, 62, 117(2), 39, 43, 119, 123	

もかく、たとえルートに面していても、シェルパ族とは材料がかなり異なる観光客用の食料は、一毛作帯に属するクンプでは多くを南からの補給(バザール)に頼っているのが現状である。他村の行政区にある土地の多くはやはりジャガイモ・野菜耕作や干し草づくりに使われ、また、ルート沿いの副住居の場合も、耕地が付随している場合は、たとえその意義は変化しているとしても、農牧生産の為の滞在に使うという目的をも兼ね備えているのである。

近年の観光化に伴う経済変化を念頭におけば、これら村外の土地や家屋が売買されたり貸し借りされることが当然考慮されねばならない。しかし、基礎データ表2に見るように、34世帯のもつ私有地はほとんどナムチェにいた先代の親から相続したものであり、比較的近年の土地の増減に関するものでは、ナムチェやその近くでの家屋建築のために宅地が取得されるといった程度の例である。また貸借も、先述のごとく人手が極端に少ないというような特別な場合に限られている。

従って、表3で示される村外の土地所有の現況は、数十年前から基本的に大きい変化はなく、世代交代によって細分化されるとか、少しずつ開拓されたり売買された程度のものであった。その土地の利用の権利も他人にはわたらず、先代から子

孫の手へと、委ねられていっているといえる。これら村外の私有地での土地利用の現状については、今回の調査では十分には把握できていないが、少なくとも聞きとった限りでは副住居もない比較的遠方の私有地にも、テントを家畜に担がせるなどして訪れ、ジャガイモの栽培や採草を行っており、その他の目的での利用は聞いていない。

現在に至るまで、ナムチェ村の中でも比較的多くの世帯が村外にまで私有地を持っており、それは農作物の栽培や草取りに利用されていた。ナムチェ村民もかつては季節移住する生活をしていたということを考えれば、これらの村外の私有地の広がり、歴史の展開の中では、伝統的な生業様式である農牧的トランス・ヒューマンスに特徴的な土地保有、土地利用の名残として残ったと理解しうる。そうであれば、ナムチェを「非農牧」村として例外化させるのではなく、ナムチェの農・牧は、他の村の農牧と連続したものとしてとらえられなければならない。さらに、交易(あるいは現在の観光)についても、ナムチェだけが「例外的に」これらに特化していたのではなかったがために、さほど交易には依存しない他の隣村の交易も、ナムチェの交易と共通・連続する性格を持つものとして考えねばならないのではないかと、この点について考える。

6. クンプのトランス・ヒューマンズの変質

(1) 典型的なトランス・ヒューマンズとは何か

何度もふれたように、これまでの研究は、クンプシュルパの伝統的な経済を、トランス・ヒューマンズを基礎に据え、農牧生産中心の、交易への依存のすくない生業にあるとしてきた。基本的にはこれに賛成したい。しかし、トランス・ヒューマンズを一つの生業様式として個性的なものと考えるとき、なにがその特徴的な形態であり、意義であるのかは問題となる。

西北ブータンのヒマラヤ南面には、ラヤ（標高3800メートル）という村がある。この住民もシュルパ族に似て、13世紀頃、チベットから移入してきている。おそらくこの地方の最初の開拓者であったと思われる。しかしここは歴史上長距離交易のルートであったことはない。この村人は、男女の衣服、女性の装飾などにおいて、明らかに周囲の谷のチベット系農牧民とは異なった文化を保持している。作物は大麦、家畜はヤクがほとんどすべてで、一世帯あたりの頭数も20頭から50頭くらいの豊かな農牧社会である。彼らは村より下方を農地として開拓したりしようとはせず、ヤクの移牧を中心としたトランス・ヒューマンズをしている。男も女も仕事の中心は家畜の世話である。交易は、秋の時期に南方の3000メートル程度の村まで出かけ、ヤクやその乳製品と引換に米などを得ている。チベットからも、かつては塩や日常生活品を得ていたはずではある。現在でも学校に通う子供は少なく、子供の手も労働力として貴重である。一妻多夫も一夫多妻もあるが、一妻多夫が半分以上を占める。また、正確な情報はないが、独自の風俗が保持されていることからすれば、近現代にチベット人がほとんど流入してはいないと考えられる。また、彼らが南方に出稼ぎなどで移住しているという例も聞かない。この村を含め、ブータン西北部の農牧諸村落は、一般的に夏の高山放牧が忙しい時期には交易などしない。湿潤なヒマラヤ南面高地の典型的な自給的農牧社会（トランス・ヒューマンズの原型）を想定するならば、あきらかに、このラヤはクンプ各村より典型例としてふさわしい村落であろう。

トランス・ヒューマンズの形態上の特徴は、山岳地帯で、標高差を季節移住しながら牧畜生産、農耕生産双方に携わるといことである。当然のことながら、獲得される生産物は牧畜産物と農耕

産物である。世帯や村落程度の集団でこれを運営しようとするれば、双方の生産の拡大は、ちょうどナワ（家畜管理制度）のところでみたように、抵触しあう部分を含む。空間的な意味と労働力の配分という二つの意味においてである。耕地の空間的拡大による農耕生産の拡大（開墾）は、放牧地の減少であり、また逆に、家畜頭数の増大による牧畜生産の拡大は、天然草地に依存した牧畜である限り、必要な放牧地が増えるということである。また、こういった耕地の空間的拡大、家畜頭数の増大は、どちらも労働力の増加を要求するものである。だから、世帯や村の働き手が限られ、空間的にその範囲が限られている以上、農・牧生産の間に混合農業のような有機的な連関をつくるがごとき技術開発（土地生産性の向上）がなければ、トランス・ヒューマンズによる農牧生産も、どこかで頭打ちにならざるをえない。

しかし、ここで、トランス・ヒューマンズの形態上の特徴が季節移住であることと、それを生まざるをえない事情が家畜にあることからすれば、移動を要求する牧畜生産という意義にこそ、トランス・ヒューマンズの第一の意義を認めたい。そうすると、移動を必要としない定着した畜産や定着農耕は第一の意義とは抵触する部分も含んだ第二の意義とすることができ。換言すれば、前者を牧畜的意義、後者を農耕的意義といえることができる。また、生業という意味合いからいえば、自給性の強い、農牧生産に多くを依存した段階を、ヒマラヤ南面高地のトランス・ヒューマンズととらえた方が良からう。このような意味から、とりあえずラヤの例を典型例として考察を進めたい。

(2) クンプにおけるゾウの増加

ラヤを典型例として考えたとき、クンプシュルパ一般なり、各村のトランス・ヒューマンズは、いかなるものであるか。もし第一の牧畜的意義に重点のあるトランス・ヒューマンズをクンプに「伝統的な」生業様式だったとするならば、それは、今世紀前半などのチベット交易がすでに発達していた頃よりもさらに古い時代に当てられるべきであろう。その理由は、まさにFurer-Haimendorf自身が示しているように、「クムジュンなどの村でも、1957年の時点で108世帯のうちで高地放牧を必要とするヤクを飼養する世帯は17世帯にすぎず、標高の異なるところへ季節移住をせざるをえ

ない、より純粋な意味でのCattle Economyに従わざるをえない世帯は意外に限られており、それ以外のゾウ・ウシ飼養世帯はむしろ村の近くの遙かにせまい範囲内で放牧し、彼らはヤクを飼うことに価値を認めながらも、村での乳の獲得に便利なゾウ・ウシ飼養をやめてヤク飼養に移行したいなどとは志向しなかった有り様であった」からである(Fürer-Haimendorf, 1975:45-46)。このときすでに、クムジュンのような古い村でも大多数の世帯は農耕中心であり、また、彼の指摘に従えば、ヤク牧民が不足する一方で、交易に手を出す村人は増えつつあったのである。かりに彼の示す数字が正しいとして算出すれば、1957年において1世帯あたりの牝・牝の牛類家畜頭数はナムチェで3.3:1.9、クムジュンで0.5:3.7である。実にナムチェの方が世帯あたりの飼養頭数としては多いほどではあるが、それはともかく、クムジュンの乳ウシの大多数を占めていた牝ヤクの飼養が特定の世帯に限られており、一方ナムチェの乳ウシの多くが乳の多い牝ゾウであったことを考えれば、農耕民として両村に定着している村人の間に、日常生活で消費するための乳を得ることににおいていったいどれだけの違いがあったのか疑わしい。さらに、1971年にはクムジュンでは牝ヤクの数激減し、その分だけ牝ゾウが増えていることに明らかこれが進行していることがみられる。

農牧生産に依存しえず、交易に依存したナムチェにおいて、交易の上でも乳利用の上でもゾウの持つ便利さがその経済を回転させる機軸としてあっただけに、クムジュンでのゾウの増加が意味するものは大きいように思われる。

(3) 農耕民化としての変質

このように考えてみれば、この付近のヒマラヤ南面高地の自然環境に住む住民にとっては、ゾウの持つ利点は、すべて、定着農耕、あるいは交易にとって便利なことばかり(扱い安さ、輸送力、低所順応、乳の量)であって、ヤクの群れに頼ったヤク牧畜には特に有利な家畜ではない。高地には弱いがために、むしろ移動する牧畜生産にはじやまな家畜である。これらから、ゾウ飼養の増大は、その飼養者たちの定着農耕民化の指標、ひいては交易民化の指標であり、逆にヤクは移動を強いるがためにこれへの執着は、第一の意義のトランス・ヒューマンズへの執着の指標と考え得る。

以上のことから、「伝統的」村落であるクムジュンもまた第一の意義でのトランス・ヒューマンズを捨てつつあり、この意味においてクムジュンもナムチェと同じ物差しの上に当時すでにあったといい得るが、もちろんナムチェとはまだまだ遠い隔たりもあったはずである。

それは、ナムチェの家畜種が交易・販売目的の牝ゾウに極端に片寄っていたこと自体が示すように、ナムチェの場合は交易に依存しなければ生計を維持しがいというほどに農牧条件が限定されていたのであった。クムジュンの場合は村の昔からの共有地(生活圏)が広いがために、交易主体にならずとも、交易に関わらないナムチェ住民の場合ほどにはひどい生活にまで落ちることはなく、自給的生産の条件を確保できていたのである。つまり、特に技術レベルと空間上の制約から、ナムチェは第一の意義も第二の意義も最低レベルでさえ確保できない生産条件下にあったといえる。またもちろん、歴史にみたような、ナムチェの交易センターとしての社会的条件もあった。事実、これによってもっとも生産性の高い分野(交易)に労働力を振り向けることによって生活を維持してきたのである。

以上のことから考えれば、前章でみたナムチェ村民の村外土地所有の広がり、牧畜の意義が大きかった頃のトランス・ヒューマンズの残滓として残存してはいるが、現状においては、もはや移動する牧畜生産というトランス・ヒューマンズとは余り関わりがなく、ただ単に村の中に不足する利用地を補う意味で、特に標高などに関係なく村外の土地も利用しているのである。

Fürer-Haimendorfが示した1957年の家畜頭数の資料は、ナムチェの家畜保有世帯数などには疑問があるが、すでに地域内で飼養家畜種にはっきりした違いが成立しており、また、ナムチェ発生以前の他の村々の飼養家畜がやはりヤク中心であった可能性は非常に高く、ナムチェのような低所村落を生み出したからこそ、クムジュンで多数のゾウを飼養することができるようになった、あるいは、ゾウを飼うためにナムチェをつくったのではないかとさえ思われる。近現代のクムジュン・シェルパの歴史は、ナムチェを先頭とする諸村落が、徐々にゾウ飼養に傾いて、定着農耕、交易拡大へと向かっていくこと(牧畜的意義に重点をおいたトランス・ヒューマンズから離れていくこと)であったと

考えてもいいのではないかと思います。

これが進行した理由は、理論的には、人口に比べて当時の生産が頭打ちであったといえる。つまり、すでにクンプの農牧生産がほぼ労働力と空間の限界に達しており、技術レベルが発展しなかったためである。

ここでの技術レベルとは、農耕と牧畜が、単に時間的、空間的に分離して経営され、それぞれ別々に生産性を向上させるというだけの、並行した発展のみを遂げ、農耕を基準にしていえば、混合農業のように農耕生産と牧畜生産を有機的に統合する、耕地の作付け体系のなかに、家畜飼養を取り込む、といったことができていない段階にとどまったのである。

すでに述べたようにジャガイモは犁耕を不可欠とはしない。Furer-Haimendorfも、ジャガイモ畑は決して犁耕されず、ソバ畑は犁耕されることが多いけれども、それに比してジャガイモは連作が可能なのに、ソバは連作すれば収量が落ちてしまい、ジャガイモと代わる代わる輪作しなければならないとしている(Furer-Haimendorf, 1975: 27)。灌漑を要する大麦などと違って比較的降水量もあるクンプではジャガイモは傾斜地でもよく収穫でき、地力の維持も家畜の糞を不可欠とするほどではなかったと思われる。森林もそれらをもたらすからである。

また、ゾウの飼養は低地でヤクに似た産物を得ようとすれば利点の多い動物であったが、これもジャガイモと同じで特定の自然条件(標高)や生産戦略(農耕的意義や交易的意義)のもとでは別の種よりも便利なものではあったが、これも農耕と関わらせての有機的な生産性発展の道がはかれなかった。

さらに重要なことと考えられるのは、採草地であるチサがわざわざ施肥するなどの管理を行うほど「耕地」でありながら、それを使った輪作体系、地力回復に役立つようなマメ科植物や飼料作物の栽培がなされなかったということである。中央チベットではもう少し有機的連関の見られる事柄が、クンプでは便利な家畜・作物種が得られることによって逆にその連関がめざされない方向へ進展してしまっただけのように思える。

7. むすびにかえて—クンプ、ナムチェの変質に伴う諸側面—

以上のような自然条件と、それに影響される農牧生産のあり方は、基本的にはラヤの場合も同様であって、ヒマラヤ南面の高地一般について、その南面と北面、また、南面高地と南面低所の間には顕著な自然条件の差異があり、長距離交易のルートとして発達する素地は備えているといえる。しかし、ラヤの場合は、ジャガイモはほとんど意味をなす作物にはなっていない、ゾウ生産にも秀でてはいない。また、面積あたりの人口もクンプに比べてはるかに小さいと思われる。村落の下方の森林は自然のままでもかなり残っており、夏季はヒルが多くて旅行にはあまり適さない。

ではナムチェ村の交易依存に象徴的に現れるクンプの生業の変質は、なぜ、そしていかに起こったのであろうか。もちろん、ラヤとは異なった歴史的な特殊な事情があったはずであり、厳密にはそのプロセスを復元するのはたいへん難しい。しかし、ここでは、その変質に関わる重要な側面として2点だけを指摘して、稿を閉じることにしたい。

1つは、チベット人の移入が、クンプの生業の変質と関係した可能性が強いのではないかと、いうことである。

もう1つは、チベット人が生活していた地域、特にチベット農耕地帯が持っていた生業上の性格は、まさにクンプの生業の変質する方向に符合しているのではないかと、いうことである。

(1) カムバ(チベット人)たちの移入

さて、クンプ地方に古くから移入してきており、また、ナムチェ村発生の当初から村のメンバーであったカムバたちは、ほとんど皆ヒマラヤ北面からやってきた。Furer-Haimendorfによれば、ナムチェにも多いクランの一つである「Rongserwaの人たちは、すでに、シェルパとして認められるほどにシェルパ社会に参入している」"Old Established Khambas"の例であるが、古い時代にロールワリン地方やクンプ地方に入ったカムバである。彼らのもとに住んでいたRongshar谷は、中ネ国境のすぐ北にあり、クンプに比較的気候条件も近く、彼らはゾウ飼養にも習熟していた」という(Furer-Haimendorf, 1964: 24-25)。

また、「彼ら以降も、現代にいたるまで、カムバは引き続き移入を続けていた。彼らの中には塩の交易などで一時的にクンプにくるだけの者もあ

ったが、クンプでの豊かな生活にひかれてくる者も多かったのである。重税などによって、チベットでの生活は特に貧しい者にとってきびしかったのに比べ、クンプでは農繁期などには働き手が足りず、季節労働の仕事は得やすかった。クンプ地方の最低レベルの生活は、チベットでのそれより大分高く、シェルパの家の一階に寝泊まりする場所をかりて、そこの仕事を手伝いながら村で結婚して住み着き始める者も多かったのである。カムバ達は、交易をはじめ、機織り、靴づくり、仕立てなどを得意とする者が多く、それらをする事で、財をなしてゆく者も多かった」という(Furer-Haimendorf, 1964:24-25)。

ところで、Oppitzによれば、シェルパのクランはシェルパ社会に参入した年代順に並べることができる(Oppitz, 1974:236)。

1:Proto-Clans or Subclans(1530-1600)

Paldorjee, Chawa, Lama, Thaktokwa, Salakaなど

2:New-Clans(1750-1850)

Chuserwa, Mandewa, Shangup(Shangu),

3:Pseudo-Clans(1800-1850)

Tamang, Gurung

4:Khambas(1850-)

現在のナムチェでは、先にみた各表のクラン(ルー:Ru)の項目が示すように、すでに婚姻においても多くのクランが入り交じっており、また、必ずしも私有地面積などの財産とこの家系の起源についての年代的階層が対応するわけではない。しかし、そのリネージの属しているクランが把握できている64世帯のうちの22世帯が4のカムバのグループに出自を持ち、それにRongserwaを加えると31世帯に達する。一方1のクランのグループに属する世帯として確実にわかっているものは11世帯、2は17世帯、3は8世帯である。また、Furer-Haimendorfは、クムジュンやクンデでも家屋や土地を持つカムバが1957年にすでに21世帯以上あったとし、さらにカムバとシェルパの通婚が進みつつあったとしている。

最初の記述にみたナムチェ発生時のカムバの参入も含めて考えれば、ナムチェが発生した頃から現在に至るまで、もともといたシェルパの数に比して決して少なくない数のカムバ達がクンプ、ナムチェに流入し、シェルパ社会に参入し続けてきたのである。それならば、ナムチェ村の発生以後の生業、ナワの制度の衰退、クムジュンにおける

ヤク移牧の意義から離れつつあったトランス・ヒューマンスの変質など、少なくともここ1、2世紀のクンプの村々の生業経済の変遷を、カムバ(チベット人)たちと切り放して考えることは片手落ちであろう。

(2) チベット農耕地帯の生業の性格

(1) ヒマラヤ北面の自然条件

周知のことながら、ヒマラヤ山脈はたいへん明確な気候境界線となっており、その南面に位置するクンプ地方と、ナンパ・ラ(峠)を越えた北側のティンリー地方とでは、気候条件がまったく異なっている。インド洋から吹き上げてくる湿気のはほとんどをヒマラヤが遮ってしまうからである。気候の違いは、村落景観や生業のあり方にも影響している。

要約するならば、北のティンリーは乾燥度が強く、南のクンプは湿潤なのである。年によって、ナムチェにもプレ・モンスーンやポスト・モンスーンに、乾燥月の現れるときがある。しかし、1949年から1977年の平年値からいえば、乾燥月は0である。つまり、ナムチェでは一年のうち乾燥した時期はほんの少し(0/12)であるのに対し、逆にティンリーでは湿潤な時期が少し(1/12)しかないのである。植生でいうと、ティンリーには林はなく、高原に緑の草が見えるのは夏の一時期だけであるが、クンプでは常緑針葉樹が繁り、年中ほとんど地表も緑におおわれている。

この違いは農耕に大きく影響し、ナムチェでは灌漑などせずとも天水だけでジャガイモができる。ティンリーは標高の上で農耕限界にあるが、大麦が中心で、それも灌漑を不可欠とする。灌漑や犁耕をしない畑は収穫を期待しない畑をしか意味しない。ソバもジャガイモも灌漑無しでは作れない。クンプ地方でも、ディンボチェなどでは大麦の灌漑畑があるが、クンプ地方のほとんどの畑は灌漑などしない。ティンリーでは、農地の世話もクンプより大変なのである。

牧畜についても違ってくる。ティンリー地方では、ヤクなどの牛類家畜もありはするが、より乾燥に適した家畜種である羊や山羊の放牧が多い。ティンリーの農耕地帯では、およそ、頭数にしてヤクの10倍程の羊、山羊があるといわれ、ほとんどの家畜が牛類家畜であるクンプ地方と大きな対照を見せる(Aziz, 1978:22)。

地形についてみると、ヒマラヤ北面の地形は南面よりはるかに緩やかである。河床の傾斜も緩くて幅が広く、両岸の山々も、岩の露出した山岳というよりも、砂れきの多い土壌におおわれた丘陵という地形表現が適当なものになってくる。耕作に必要な水の得られる場所は川沿いの沖積地に限られるために、耕地と集落はそこに集中する。ナムチェのような斜面上のテラスには集落は立地しないのである。ただし、緩く連なる河谷沿いといっても水利の良いところは限られるために、耕地と集落が途切れることなく連続しているわけではない。集落景観の上では、ティンリー地方では平屋根で風に強い家屋であって、クンプ地方のような割板を葺いた傾斜のある屋根はみられず、周りに森林も見られない。生活のための燃料は農耕地帯においても家畜の糞である。ティンリー地方の集落と耕地は、周りを乾燥した広い丘に取り囲まれているのである。

このような農耕地帯から雪線に至るまでの土地、すなわち地表の大部分を占める丘陵部は、牧畜によってのみ利用可能な空間である。しかし良好な放牧地は農耕地帯の近くにはない。農耕可能な谷間は比較的乾燥して草に乏しいのに対し、さらに標高の高い雪線近くの高地のほうが比較的湿潤で良い草があるのである。そのようなところは野生動物も豊富であった。ティンリーの牧畜地帯は、むしろ農耕地帯より遠くはなれたところのほうが豊かなのである。ティンリーの農耕地帯にはいわゆる遊牧民（ドクバ）はいない。ティンリーとクンプの間に、Kyabrukという地域があるが、ここがちょうどチョモランマ北麓の遊牧民の住む遊牧地帯となっており、ティンリーへ牧畜産物を供給していた(Aziz, 1978:21-22, 66)。

クンプ地方の場合、湿潤な気候と急峻な地形のおかげで、耕地と放牧地はともに比較的小さいけれども、土地あたりの生産性は比較的高く、またそれらが互いに近接していた。ティンリーに比べれば、狭い範囲のなかで、孤立した自給生産に依存する社会がつくりやすいといえる。ティンリーの農民の場合、ヤクを世帯程度の規模の集団で飼っておくためには、クンプなどより広い範囲の土地を利用することができ、また多くの働き手がなければならない。

クンプ地方と同じく、ティンリー地方の住民の生活も農・牧生産と交易から成り立っている。し

かし、クンプ地方なら所詮働き手が幾人が少ない核家族程度の世帯であっても、農耕可能な集落の近くの高山放牧地を利用して狭い範囲（片道せいぜい2日の範囲）でヤクの群れを比較的小さな規模の群れで飼えるのだが、ティンリーの農耕地帯ではそれ程の狭い範囲ではほとんど山羊か羊の群れしか飼えない。ヤク放牧に適した高原は農耕地帯から遠く離れており、草の乏しい乾燥した谷間は、山羊や羊の群れしか放牧できないのである。チベット世界一般では山羊や羊からの搾乳はせず、それを輸送用に使うこともさほどしない。しかし、牛類家畜の飼養が難しいために、この地方ではこれらからの搾乳を行い、輸送用にも使っている場合がある。

ティンリーの農民の中にも数十頭ものヤクを持っていた例がないわけではない。しかしこういう富農は使用人（いわゆる農奴、奉公人）をたくさん抱えた大土地所有者であった。また、使用人に依存しない場合でも、特定の農民と牧民の間で契約関係を結んで、生産物を交換することによって、農牧生産物双方を確保する例もある。しかし、いずれの場合も世帯程度の集団の成員のみで農牧生産を満足に行うことは難しいのである。一家の生産手段を分割せず、かつ働き手を確保する社会的適応としては、一妻多夫があった。これはクンプ地方でも見られることであるが、ティンリー地方のほうがはるかにその比率が高かった。

あまり財産のない農民にとっては、農耕を続けるだけでは、豊かになれない。なんとかして、牧畜産物を得たり、交易を始めることが豊かになるための最初のステップである。羊や山羊の飼養目的は、自給用の乳・肉生産と交易で売るための羊毛の獲得にあった。乾燥のために牛類家畜の飼養は難しくとも、山羊や羊なら飼いやすいことはこれに幸いしていた。しかし、交易や農耕においては、牛類家畜の持つ値打ちはクンプの場合よりも大きい。それは、輸送、荷役、犁耕、脱穀などにおいてである。また、搾乳、糞、肉、毛などの点の利点もクンプの場合と変わらない重要性を持つ。この地方でも他のチベット世界と同じく、乳・肉などの牧畜産物はヤクのものを第一等と考えられている。ティンリーでも、ヤクは富の象徴であった。

農耕地帯にずっと住みつつ、畜力や乳の点で牛類家畜の恵みを得ようとすれば、ヤク飼養は難し

いがゾウがある。ゾウは、交易用の輸送畜、農耕用の荷役畜として便利であり、また、牝の場合は豊富な乳も出す。チベット高原にも、身体が小さく犂も引けないほどの普通ウシがいて、これも主として肉や乳をとるために飼われている。しかし、どちらもヤクやゾウに比べれば質の上でたいへん劣る。なによりも、輸送や荷役に弱すぎる。このために、クンプ地方で生産されたゾウは、大きな需要を持っていた。純血種のヤク・普通牛を得やすいクンプ地方で生産されるゾウは、たいへん優れていたのである。しかし、ゾウは一代雑種限りでその便利さは失われてしまうから、常にふつうウシの新しい血の混じった種が供給されなければならない。ティンリー地方では、宗教的な理由によって雑種生産が忌避されていた(Palmieri, 1976: 57-58) せいもあるが、優秀なゾウはクンプ地方から供給され続けなければならなかったのである。

以上のように、チベットの農耕地帯では、農耕と牧畜をともに満足に経営することは富農に限られるが、その多くは一妻多夫や使用人の雇用によってようやく働き手を確保していた。しかし、一般の農民は農耕をやっていただけでは自給レベルの確保も、富を得るステップも得がたいが故にゾウ、山羊、羊を飼うことをせざるをえなかった。豊かになるためには、何らかの手段で労働力を確保しつつ、羊毛を売ったりゾウを買ったりという交易を手がける必要があった。この状況は、自給レベルの生産を確保できていない貧民(使用人)層にとっては、ことはさらに深刻であり、生産手段を持たない以上、豊かになるためには交易に賭けなければならない性格がより強かったはずである。

このようなチベット農耕地帯の住民の生業の持つ性格、つまり特定の家畜種の持つ有利性に頼りつつ交易によって収入を確保するという性格は、まさに村落発生以後のナムチェで見られることである。大胆に推測すれば、ナムチェ経済をかつて牽引していたチベット・ネパール間交易(塩、羊毛、鉄)や、ゾウ生産は、外来者であるカムバたちが、ナムチェ、ひいてはクンプに持ち込んだか、彼らからの強い影響の元で発展してきたのではないと思われる。伝統的な高地放牧に重点をおいた典型的なトランス・ヒューマンスが本来のクンプ地方の生業様式であったとすれば、低地との交流を、より切実に必要とするのはチベットの農耕

地帯ではぐくまれた生業様式ではなかったか。移入したカムバたちが保持していた生業様式の刺激によって、ナムチェを先頭とするクンプ各村が、ゾウの数の増大に見られるチベット型農村化、あるいは交易民化(貧民化)を遂げたと考えられる。交易や出稼ぎのために、ダージリンやカトマンスなどへクンプ・シェルパが流出してきたことは有名であるが、これも、カムバたちの影響の元に起こったシェルパ社会・経済の変容ではないだろうか。

以上の推論は、さまざまな時代に流入してくるカムバ(チベット人)たちの故地がその時々を持っていた社会的、経済的背景とクンプのそれを各々正確に把握すること無しには証明できない。しかし、ここ何百年かの間、のシェルパの社会経済の変化を考えるにあたっては、検討すべき重要な視点ではないかと思われるのである。

文 献

- Aziz, Barbara N. (1978)
 "Tibetan Frontier Families" Vikas, New Delhi.
- Byers, Alton (1987)
 Landscape Change and Man-Accelerated Soil Loss: The Case of the Sagarmatha (Mt. Everest) National Park, Khumbu, Nepal "Mountain Research and Development", 7 (3), PP. 209-216.
- Carrasco, Pedro (1959)
 "Land and Policy in Tibet" University of Washington Press
- Cox, Thomas (1985)
 Herding and Socio-economic Change among Khumbu Sherpas "Kailash", 12 (1-2), PP. 63-79.
- Dargyay, Eva K. (1982)
 "Tibetan Village Communities" Vikas Publishing House, New Delhi.
- Furer-Haimendorf, C. von (1955)
 Pre-Buddhist Elements in Sherpa Belief and Ritual, "Man", Vol. 55, No. 61.
- (1956)
 The Economy of the Sherpas of Khumbu "Die Wiener Schule der Volkerkunde. Festschrift anlässlich des 25-Jährigen Bestandes des Institutes für Volkerkunde der Universität Wien (1929-1954)", Institut für Volk-

- erkunde, University of Vienna, pp. 261-280.
 — — — (1964)
 "The Sherpas of Nepal" Oxford Book Co.,
 Calcutta.
 — — — (1975)
 "Himalayan Traders" Jhon Murray Ltd.,
 London.
 — — — (1984)
 "The Sherpas Transformed" Sterling Publishers,
 New-Delhi.
 Goldstein, Melvyan C. (1981)
 High-Altitude Tibetan Populations in the
 Remote Himalaya: Social Transformation
 and its Demographic, Economic, and Ecological
 Consequences "Mountain Research and
 Development", 1 (1), PP. 5-18.
 Joshi, D. P. (1982)
 The Climate of Namche Bazar: A Bioclimatic
 Analysis "Mountain Research and Development",
 2 (4), PP. 399-403.
 鹿野 勝彦 (1972)
 クンプのシェルパにおける経済の変遷, 季刊人
 類学, 3 (2), PP. 159-186.
 — — — (1978)
 ヒマラヤ高地における移牧—高地シェルパの例
 を通して—, 民族学研究, 43 (1), PP. 85-97.
 — — — (1989)
 ネパール東部山地の定期市 (I), 金沢大学文
 学部論集 行動科学篇, 第9号 別冊
 河口 慧海 (1978)
 「チベット旅行記 (二)」, 講談社学術文庫
 小林 茂 (1987)
 ネパール・ヒマラヤのヤク—ウシ雑種生産
 福井勝義・谷泰 (編) 「牧畜文化の原像」
 pp. 207-244., 日本放送出版協会
 Markham, Clements R. (1876)
 "Narratives of the Mission of George Bogle
 to Tibet and of the Journey of Thomas
 Manning to Lhasa", Bibliotheca Himalayica
 Series 1, Volume 6, New Delhi (Riprint 1971)
 Oppitz, M. (1974)
 Myth and Facts: Reconsidering Some Data
 Concerning the Clan History of the Sherpa,
 in "Contributions to the Anthropology of
 Nepal", (ed.) by C. von Furer-Haimendorf,
 Warminster, Wilts., Aris & Phillips.
 Palmieri, R. P. (1976)
 "Domestication and Exploration of Live-
 stock in the Nepal Himalaya and Tibet:
 An Ecological, Functional, and Culture
 Historical Study of Yak and Yak Hybrids
 in Society, Economy, and Culture"
 Unpublished Ph.D. Dissertation, University
 of California.
 Pawson, Ivan G., D. D. Stanford, and V. A. Adams (19
 84)
 Effects of Modernization on Nepal's Khumbu
 Region: Changes in Population Structure
 1970-1982 "Mountain Research and Develop-
 ment", 4 (1), PP. 73-81.
 Pawson, Ivan G., D. D. Stanford, V. A. Adams, and
 Mingma Norbu (1984)
 Growth of Tourism in Nepal's Everest
 Region: Impact on the Physical Environment
 and Structure of Human Settlements
 "Mountain Research and Development", 4 (3), PP.
 237-246.
 Sacherer, Janice (1974)
 The Sherpas of Rolwaling: Human Adaptation
 to a Harsh Mountain Environment
 "Objets et Mondes", 14 (4), PP. 317-324.
 月原 敏博 (1987)
 「ブータンヒマラヤにおける生業様式の垂直構
 造」 (未発表) 京都大学文学部地理学教室卒業
 論文
 柳本 治美 (1970)
 シェルパ族の食生活を探る, 季刊人類学, 1 (2)
 — — — (1971)
 シェルパ族の食事, 季刊人類学, 2 (4),
 PP. 172-232.